
おさななじみの法則

日月あきら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おさななじみの法則

【Nコード】

N4548U

【作者名】

日月あきら

【あらすじ】

萩の花女子高2年生の橘風花たちほな ふうかは、幼馴染の長谷巧はせ たくみが小さい頃から大好き。でも妹としかみられてなくて、自分の思いを伝えることができない…鈍感な女の子と、そんな女の子にメロメロな男の子のお話。*自分の信念が信じられないため、念のためR15です。

幼馴染って、近いようでうんと遠いと思う。

生まれる前から家族ぐるみのお付き合いで、それこそお腹の中にいる頃からの付き合いってことになるんだろっけ。

まるで本当の兄妹のように育ってはいてもホントの兄妹ってわけじゃないくて、回りから求められるまま”兄”と”妹”のような関係を演じているって状態。

無邪気にただ「好き」と言っていたときと違って、平和のために妹役演じてますって感じるようになったのは、いつの頃からだったんだろう？

”兄のような存在”というポジションにいる彼への特別な想いをはつきりと自覚した時から、まるで自分が嘘っぽくてもどかしい。

がんばって何かを隠すってことは、どちらかといえば不得意で。だからこそ、ついつっかりするとずっと見つめてしまう自分が、お馬鹿さんだって腹立たしい。

生まれる前から彼しか見えてなかったんじゃないかって思うほど、私の心には彼しかいない。

……だって、心が全部持ってたかちやっただぐらいに、好きなんだもん。

そういうワケで。

私の心の一番大切な部分に大好きな幼馴染・長谷巧はせたくみが鎮座している事は、私にとってごく当たり前な、自然の流れだったんだと思う。

私の大切な初恋は、片思いのまますっかり現在進行中。

私の名前は橘風花。たちはな ふうか 萩の花女子高等学校2年生。

2年生ももうすぐ終わりなのにまだ16歳なのは、私が早生まれなせい。

中学1年生でぴったりと成長を止めてしまった身長は、たったの148センチ。

∴学校で一番ちびっこいらしくて、いつでもどこでも人に埋もれてしまっている状態。

さらに哀しいほどの童顔のせいで、年齢とともに当たり前に出来た体の凹凸をだぶつとした服で隠してしまえば、小学生に間違われる事だってあるほどだ。

∴認めたくないけど、かなり頻繁に。

もしかしたら、酷い猫っ毛をブローするのが面倒でツインテールに
してしまっているふわふわした髪の毛のせいかも…？

いやいや、お母さんの趣味で結われている、このひらひらと風に靡くちよつぴり太目のピンクのリボンのせい？

ちよつとした事でほっぺをぷうと膨らませてしまっ、あまりにも幼い表現力のせい？

……私って何から何まで子供っぽく出来ているんだって泣きたくなる。

せめて中学生ぐらいに見られたら……謙虚で切なる願いが近い将来叶うかどうか、私にも分からない。

たつた一つ言えるのは、“幼馴染”で“心の姉”で“大親友”の長谷更紗がもう少し幼ければ、いつも隣に立っている私が少しは大人びて見えるのは確かだった事。

更紗のお父さんのギルバートさんはイギリス人で、お母さんの由梨絵さんは日本人。

夫婦仲睦まじいおじさんとおばさんは容姿もその性格も生き様も素敵で、私の憧れの人たちだ。

そんな二人のおいしい所取りしたとしか思えない更紗は女の子でもため息をついてしまうほどの美貌の持ち主で、知らない人なら“もうすぐ大学卒業です”と言っても信じてしまうほど大人びている。

学校帰りに近隣の男子高校生がプレゼントを持って立っていたり、お出かけするたびに何度も見知らぬ男の子に声をかけられるのだから、当然のことだと胸を張って言える。

サラサラのロングストレートの黒髪と、知的に輝くブルーグレイの瞳。

雪のように真白な肌を彩る、まるで花びらのような唇。クールビューティとはまさに彼女のためにある言葉だ。

外見の美しさもそうだけど、彼女の本当の魅力はその心・性格。そっけなくてクールな彼女だけど、でもほんとはとってもやさしくて温かな人なのだ。

人の痛みがわかる彼女の言葉は、厳しくても相手のことをしっかりと考えた上での発言ばかり。

口さがない人は「性格も言葉きつい」などと言っつけれど、更紗ほど思いやりのある女の子を私は知らない。

そんな彼女には、双子の兄がいる。

彼こそ私の片思いの相手・巧くん。

更紗と私は幼稚園からエスカレーター式のお嬢様学校である萩の花女子に通っている。

巧くんは男の子なので幼稚園の頃から中学校までは萩の花の男子部に行っていたが、今はこのあたりでも有名な共学の進学校、青風林高校に通っている。

開校当初は生粋のお嬢様学校だった萩の花は男子部が中学校までしかなくて、高校進学時巧くんは家から一番近い青風林に入学したのだ。

萩の花でも女子と男子が同じ校舎で勉強することがなかったから変わらないと言えは変わらないけど、行事の時は男女一緒だったし、やっぱり違う学校になっちゃったことは寂しかった。

巧くんの学校は私たちの学校からも近いから一緒に登校できるし、下校途中に待ち合わせしたり

偶然会えたりするので、まだよかったかなって思うけど。

でも、一緒にいる時間が増えると、それだけ見たくないものをたく

さん見なければならぬ訳で…。
それが目下、私が感じるちくちくの原因だったりする。

巧くんは身長が185センチもあって、ちびっ子の私からすれば彼は見上げるほどに高い。

しかも容姿もきつちりギルバートさんから受け継いだ彼は、それはそれは魅力ある端正な顔立ちをしていて、さらさらできらきら光るキャラメルみたいなブラウンの髪と更紗と同じブルーグレイの瞳は大勢の女の子達を一瞬で虜にしてしまうほど甘い。

巧くんが立っているだけで女の子達の視線を釘付けにし、手を上げただけで悲鳴のような歓声が聞こえるほどだ。

しかも、更紗同様、彼もまたスポーツも勉強も出来る文武両道派で、何から何まで理想的。

さりげない気配りと爽やかな笑顔、きりりと凛々しい立ち居振る舞いに時折見せるいたずらっ子のように無邪気な表情：これじゃ、女の子達が放っておくはずがない。

そんな彼は、近隣の女子高生の間で”青風林の騎士様”などと呼ばれている有名人だ。

けれどそんなことを鼻にかけることもなく、誰にでも等しく優しく、穏やかで、もの静かで。

聞き上手な彼はいつも人の心をほぐしてくれ、情も人望も厚い。

こんなところ、由梨絵おばさんにそっくりだなあと思う。

生まれる前からずっと一緒にいるけれど、そんな彼に惚れ直さない日などないほどだったりする。

こんなに人気者の巧くんの傍にいられるのは、他の女の子達と違って恵まれた環境にあるお陰。

そんなんじゃないきゃ、こんなちびっ子で魅力の欠片もない私なんて、巧くんと一緒にいられるはずないもの。

そんなことを考えては、ため息ひとつ。

実は、橘家と長谷家は親戚ではないのに同じ敷地内に住んでいる。うちは代々この辺一体の地主で、自宅の敷地に所有の山がくっついていてるせいもあってとても広い。広い庭と天然の小川と山に囲まれたこの土地の中に、戸建の家が3軒建っている状態だ。

ひとつは大きな昔ながらの民家である、おじいちゃんの家。おじいちゃんが建てたという趣深い和風建築は、私の家。そして、もう1軒が和風ながらもどこか西洋の雰囲気があるのが長谷家…つまり巧くんと更紗の家だ。

この立地条件もあって、言葉に違わず、私たちは一緒に育ってきたのだ。

なぜこうなったかというと、それは私たちが生まれる前の話。ギルバートさんが今も現役の有名な大工であるおじいちゃんに弟子入りしたのが縁なのだそう。

イギリスの大学で建築を学んでいた若かりし頃のギルバートさんは小さい頃から興味を持っていた日本建築を自分の目で見てみたいと一念発起し、日本にやってきた。その時知り合いの紹介で出会ったおじいちゃんの仕事振りに惚れこみ、そのままうちの住み込み弟子となったそう。

もちろん、当時大学で建築を勉強していたお父さんとお父さんの弟である弘道おじさんともすぐに仲良くなった。志も同じ3人は意気投合し、お互いの建築に対する情熱を語り合う、同志とであり親友となるにはさして時間がかからなかったそうだ。

弘道おじさんが大学3年生になったある日、おじさんは突然卒業制作代わりに家を建てたいと言い出したらしい。

普通なら止めそうな気がするのだけれど、根っから建築家であるギルバートさんとお父さんの心を刺激したらしく、いつの間にか3人でデザインした家を敷地の中に建築しよう!と決まっていたそう。

そしてもうすぐみんな建てた家が完成という頃に訪れた、運命の出会い。

当時お父さんと婚約していたお母さんが、大親友である由梨絵さん連れて建築現場に遊びに来た。

由梨絵さんを見た瞬間、ギルバートさんはあっけないほどあっさりと恋に堕ちたそうだ。

そして、その場で速攻プロポーズ。

あまりの電光石火ぶりに呆れたみんなは断られるだろうと笑っていたのに、由梨絵さんの返事は「はい」の一言。

聞くと、由梨絵さんもギルバートさんに”瞬間一目惚れ”だったらしい。

回りも驚くほどのスピード結婚で、完成した家は二人へのプレゼン

トとなった。

今でも目のやり場に困るぐらいラブラブな2人の、大切なマイホームである。

陽だまりのように穏やかな空気を持つうちの両親や、いまだラブラブのギルバートさん・由梨絵さん夫妻を見て成長してきたせいか、私は小さい頃から素敵な結婚というものにひどく憧れていた。

私達が小さい頃から、由梨絵さんはよく「ギルはね、私の運命の人だったの」って幸せそうに話してくれた。

未だ恋する少女のように夫への愛を語る由梨絵さんを見て、巧くんは苦笑し、更紗は呆れた顔するけど。

私はうらやましくてたまらなかった。

だから幼い頃の私は、運命の人ってどんな人かな？早く運命の人に会いたいなって、ずっとずっと考えていた。

その頃、一人っ子の私は巧くと更紗のことを大切な本当の兄妹だと思っていたし、巧くんに対する気持ちが悪だなんて考えてもいなかったけれど。

それが中学3年生のある日。

偶然、巧くんが私と同じ中学校の女の子から告白されている場面に

遭遇してしまった。

時々廊下ですれ違う、大人っぽくて華やかな美人だなあと密かに憧れていた女の子だった。

夕暮れの公園でも分かるほどに顔を真っ赤にした女の子に優しく微笑みかける巧くんを見た時、胸にすぎずきと得体の知れない痛みが走った。

女の子がゆっくりと巧くんの胸に飛び込んだ時には見ているのが我慢できなくて、私は脱兎のごとくその場を逃げ出していた。

気づいた時には私の部屋のベッドの上で、突然走り出したことで乱れた呼吸を整えることも出来ず、泣きながら痛む胸を押さえていた。

ご飯も食べずに部屋に籠って、一晩中泣いて、泣いて、泣きはらして。

気付いてしまった。

大切に育てすぎて、持て余すほどに大きく育ってしまった恋心に。

巧くんを想う度に苦しくて、苦しくて、たまらなくなる自分自身に。

その日から、私の秘められた片思い生活が始まったのだ。

巧くんに彼女がいるとか、過去にいたとか、そんなことは全然分からない。

確認するのが怖くて、聞いたことすらなかった。

ただ、わかっているのは。

巧くんにとって私は、今も昔も幼くて手のかかる、妹みたいな存在だっただけのこと。

小さい頃から体が小さかった私は、更紗がそばにいない時には必ず近所の悪ガキ達にからかわれて泣かされていた。

そんな時、いつも巧くんがどこからともなく現れて、私のことを助けてくれた。

背中に私を庇って数人の男の子達に臆することなく立ち向かってくれた巧くんの背中が、私にとっては大きくて、世界一安心できる防壁だった。

いつもどんな時もドジで泣き虫な私に手を差し伸べて、「心配で見たらんないよ」と優しく笑って助けてくれる。

いくつになってもお子ちゃまで手のかかる私のことを気に掛けてくれるのは、巧くんが優しすぎるせい。

そんな巧くんにお母さんと由梨絵さんがいつも「たつくん、過保護すぎ」笑ってる。

みんながいつまでも頼りない私に呆れてるような気がした。

それがもどかしくて、辛い。

巧くんとつり合う位の、大人の女になりたいのにな…努力しているんだけど、実る気がしないのはなぜだろう？

願いがかなうのはいつの日か？

これまでやってみては挫折したあれやこれやを思い返し、ため息を

つくしかなかった。

「はふう……」

ぎつちりと詰まった6時間の授業が終わり、のろのろとカバンに教科書を詰め込んでため息をついた。
開放感でいっぱいになるこの時間、私はどことなく憂鬱な気持ちになる。

お嬢様学校のくせにハードすぎる授業のせいだ。絶対。
もしくは、あまりにも大量の宿題が課せられたせい……。

今日から期末テスト1週間前に入るので、私も更紗も部活や委員会の予定がない。

テスト勉強をしなきゃいけないから宿題の数は少ないけど、提出期限が迫っているレポートやら

テスト勉強やら、やることはたんまりある。

飛びぬけて勉強ができるわけではないので、何かと苦勞が多いのだ。

といいつつも、家にさくさく帰れることはとってもうれしかったりする。

テストは煩わしいけど、早く家に帰ると巧くんも今日からテスト前なので長く一緒にいられるのだ。

中学生になってから、夜に遊びに行っても巧くんは部屋に入れてく
れなくなった。

いつまでもリビングでぐだぐだしゃべってるのも申し訳なくて、高
校に入学する頃にはおしゃべりはお風呂に入る前までって暗黙の了
解が出来上がっていた。

巧くんも部活に入ってるし、少しでも長く一緒にいられる時間が取
れるようにがんばらなければ、10分もゆっくり話ができなくなる
のだ。

そういう意味では、テストはかなりおいしいと思う。

…なんて考えるといつもの疲労感は一瞬で吹き飛び、うきうきと心
が躍る。

私は、うーんと両手を挙げて伸びをした。

「風花、帰りましょ？」

振り返れば、見慣れたブルーグレイの瞳が私を見つめていた。

巧くんと同じ色の瞳に、ちょっとだけどきりとする。

私の小さな動揺を見透かしたようにくすりと笑った更紗は、サラサ
ラの長い黒髪をかき上げた。

”きれい…”

その大人っぽい仕草は、何度見ても見惚れてしまう。

ついついほお…とため息をついてしまう。

「…なに？」

「ん？更紗、ホント、きれいだなあ〜って思ってた」

「…風花、あのねえ…」

「どうやったらそんな風に大人っぽくなれるんだろ？」

私なんて誕生日が来れば年齢が増えていくのに、まるで顔が時の流れに逆行してる

みたいなんだもん。

高校生になってもまだ小学生と間違われたりでさっ…嫌になっちゃう」

ぷつと膨れ顔で更紗を見上げた。

彼女の身長は165センチ。そして私は148センチ。

17センチの差は、意外に首が疲れる。

更紗の華奢な手がぼんぼんと頭を叩いた。

幼い頃からこの双子の兄妹は、いつも私を宥めるように優しく頭を叩くのだ。

自分の幼い行動に気付いて、顔が赤らんだ。

「小さいのも風花の魅力だって、いつも言ってるでしょ？」

それに、いいんじゃないの？

幼い顔と身長のせいで小学生に見えるけど、そのボディラインは完全に大人の

女性そのものなんだし？」

「またっ！そんな事言う！！」

スレンダーな更紗と違って、私は身長割には胸回りの肉付きがよかったです。

…太ってるってわけじゃ、ないと思うんだけど…

以前3人で家電店の密集した街に行き迷子になった時、いかにもオタクっぽい男のたちに囲まれてゲームに出てくる何とかってキャラみたいだと低い歓声が起こった時は本当に怖かった。興奮したでっかい男の人が飛び掛ってくる寸前に、巧くに助けられたんだけど……

生きた萌えキャラって言われても…全然うれしくない。

以来、好奇の目に晒されるのが嫌で、だぼつとした服を着るようになって、それと同時に小学生に間違われる確立が9割台に跳ね上がった。

アンバランスって、ほんとにどうしようもなく困る。

「風花。用事がないんだったら早く帰りましょ？綾乃さんの新作ケーキがあるんでしょ？」

「うん！」

綾乃さんってというのは、私のお母さん。

お菓子作りが趣味で、更紗も帰宅が早い日は必ずお母さんの作ったおやつを食べている。

もちろん巧くんも帰宅したらうちに寄るのが習慣になっていて、時々私達よりも早く帰って来てはお母さんと二人でのんびりお茶を飲んでいたりするのだ。

由梨絵さんは自分で染めた糸を使って織物を織り、いろいろな小物や着物を作るのが仕事だったりする。

由梨絵さんが作るものは昔から評判がよくて、日々忙しい由梨絵さんに代わり、お母さんが一手に子供達の面倒をみてきた。

だから「風花の家が第二の我が家で、綾乃さんが第二の母」だって、二人はよく言っている。

慌ててカバンを持って、手を振るクラスの友達に挨拶をしてから更紗と二人で教室を出た。

校門を出てた途端、私はきよるきよると周囲に目を配った。

「…今日は誰もいないわよ？」

そっけなく言い放った更紗は、さっさと自宅目指して歩き出していた。

ほぼ毎日、更紗目当ての男の子たちが校門の前に数人たむろしていたりする。

声かけられる前にさっさと通り抜けたり、話しかけようとしたと単に更紗が睨みつけるから実害はないけど…たまに以前私を取り囲んだ男の子達と似たような空気を纏った男の子もいたりして、ちよっぴり怖い時もある。

「あっ！待ってっ！！」

「気配がないうちに帰らなきゃ…また変なのに捕まったら、巧が煩いんだもの」

「ふふっ！人気者の妹を持つと、兄の苦勞は耐えないんだねえ」

「……」

巧くんはもてる妹が心配らしく、しよっ中「下校中は気をつけるよ？」と更紗に注意していた。

巧くんの忠告をいつもうんざりした顔で聞いているけど、やっぱり兄の言葉は気になるみたい。

「ほんと、更紗と巧くんって仲いいよね」なんて言って突然黙ってしまった更紗を見ると、呆れたように目を細めて私を見ていた。

「え？何？私、変なこと言った？」

「…なんか、最近巧が可哀想に思えてきたんだけど？」

「なんでなんで？」

「…あゝ…ま、いいわ。気にしないで」

「なにになにい〜？」

「…：風花、鈍すぎるんだもの…」

「そんなことないもんっ！人をお子ちゃまみたいに言わないでっ！」

「そういうところ、十分に”お子ちゃま”よ？」

人差し指を口元に当てて、わざとらしく首を傾げる更紗。

さらりと肩から流れる真っ黒なストレートヘアがきれいで、とっても魅力的だけど…くっ…くっ…くやしっ！！

頬を膨らませて視線をそらし怒っている事を主張していると、更紗がぼんぼんと頭を撫でてくれた。

そつと何つと、ブルーグレイの瞳を優しくに細めていた。

「…やっぱりお子ちゃま扱いじゃない…」

…なんて言ったけど、更紗の手はとても温かくて…結局小さな反抗心なんてあつという間に消し飛んでしまう。

二人でおしゃべりしながら歩いていると、いつの間にか家の近所にある公園の前まで来ていた。

二人で帰るとあつという間にたどり着くなあゝとぼんやり考えていると、電柱にもたれて立っている男の子が目飛び込んできた。

住宅街でたいしたお店もない辺鄙な公園で、ぼんやりと空を見上げ

て突っ立ってること自体が怪しげだ。
あんまり関わりたくないな…素直にそう思った。

まるで何事もないように装いつつ足を速めたところを見ると、更紗も同じように感じているようだ。
私も俯いて更紗の後に続いた。

男の子の前を通り過ぎようとしたその時、突然「よお！」と手を上げた。
びっくりして顔を上げたら、ぱつちりと目が合ってしまった。
周辺を見回しても私たち以外には誰一人いない。
どうやら私たちに声をかけてきたみたい…どうしよう？

見たことない高校の制服を着ている。
茶髪で背が高く、精悍な顔立ちをした男の子だ。
体ががっちりしているところを見ると、何かスポーツをしているのかもしれない。
顔には…見覚えがない…多分。

更紗が私の前にすっと立った。
男の子はニヤニヤ笑いながら、私達の前に立った。
男の子と話をするのが苦手な私は怖くなって、ぎゅっと更紗の制服の裾を握った。

「突然呼び止めて、ごめん。橘さん、君に話があるんだ」
「ほえ？」

わっ、私ですかっ!?

自分の頬がありえないほど引きつったのがわかった。

私の気配を察知した更紗は背中に私を庇いつつ、凜とした通る声で言った。

「この子は男性と話するのが苦手なの。用件なら、私が聞くけど？」

「…マネージャー付きなんだ？でも俺、ちゃんと彼女と向かい合って話がしたいんだよね」

彼の強気なもの言いに完全にびびってしまった私。

更紗は無表情で冷たい視線を男に向けたまま言った。

「…さっさと散って頂戴」

大概の人間があっという間に逃げていく、絶対零度の更紗の声が低く響いた。

けれど彼はそんなことには全く頓着する様子もなく、ずいぶん機嫌がよさそうに続けた。

「橘さんとお近づきになりたくて、わざわざこんなところまで来てるんだぜ？」

話もせずに帰るなんて、できるわけねーじゃん」

「風花の気持ちは無視ってわけ？」

「お互いに分かり合えば、彼女が俺に惚れる可能性だってあるわけだぜ？」

「まずはお友達から、ってやつ？」

「…可能性は限りなくゼロね…行きましょ、風花」

「…う、うんっ」

更紗の制服を握ったまま、慌てて彼女の後を歩いていった。

「待った！」

驚く間もなく、突然カバンを持っている手を捕まれ、もの凄い力でぐいと後ろに引かれた。

「きゃっ！！」と小さな悲鳴を上げた時には、私は見知らぬ彼に抱きしめられていた。

「うわ…ホント、ちいせえ…かわいい」

ぐりぐりと無遠慮に頭を撫で回されたかと思うと、ぎゅっぎゅっとして体を抱きしめられた。

ぴきんと体が硬くなり、足はがくがくと震えだす。

” やだっ！怖いっ！！ ”

早く逃げ出したいのに、恐怖で声が出ないし、思うように抵抗でき

ない。

ぶわっと両目に涙が溢れ出す。

絶体絶命。

…どろりしやうしう…？

見知らぬ男に抱きしめられ、まるでぬいぐるみのように扱われて。もうわけがわからないっ！

あまりに強烈な体験で、涙すら出ない。

私は心の中で必死になって巧くんの名前を呼んだ。

いつだってピンチになったら、絶対に来てくれる私の王子様だもん！
きつと来てくれる…はず。

「はあ…ったく。…お前…いい加減にしるよな…」

恐怖に震えているところに降ってきた声。

まるで子守唄のように、聞くだけで気持ちが柔らかくなってしまっ
この声は…

「巧くんっ!!」

思いつきり体を擦ってこの変態男の腕から脱出すると、一目散に巧

くんの胸に飛び込んだ。

やっぱり来てくれた！

いつだって巧くんは、私のヒーローなんだもんっ！

巧くんの腕が背中に回り、いつもみたいに私を優しく包み込んでくれた。

「…風花、大丈夫だよ？」

「ふえ…っ、こ、怖かったよぉっ…！」

「泣かないで？」という囁きとともに、額に巧くんの唇が落ちた。安心できる温もりに、ふと体中の力が抜ける。

小さい頃から私が泣いていると、巧くんは必ずおでこにキスを一つくれる。

これは”大丈夫だよ”のおまじない。

このおまじないさえあればどんなに悲しい時も辛い時も、”大丈夫！なんとかなるよ！”って思うことが出来るの。だからほら、あれだけ怖かったのに、恐怖心はちよっとずつ小さくなっている。

「…なんだよ巧、お前、相変わらずべたべただなあ」

「虎之助、やりすぎだ、完全に」

巧くと男の会話に驚いて、男の子をちらりと振り返った。

どうやらこいつは巧くんの知り合いみたい…？

あれ…この顔…どこかで見たこと…

うん、と考えて記憶の糸を辿り、たどり着いた先にあった答えに

「あ！」と声を上げた。

「幼稚園の頃からずっと風花を追い掛け回していた…東郷虎之助」

私より一歩早く答えにたどり着いた更紗が、事務的にいった。

…やっぱり。

「」名答」

にやりと意地悪く笑った顔、確かにあのにつくき虎野郎のものだ。

嫌な思い出が瞬時に蘇ってきた。

小さい頃から体が小さくてドンくさかった私は、近所の徒党を組んだ悪ガキたちにおもしろ半分に近い掛け回されていた。

いつも巧くんや更紗が助けてくれたけど、その頃から男の子の集団と遊ぶのは苦手だった。

そしてそんな私に追い討ちをかけたのが、この虎之助だった。

同じ幼稚園に通っていた縁で、やつは巧くんと大の仲良し。

そんなある日、巧くんが幼稚園で一番仲のいい友達だから紹介したいと、虎之助をうちに連れてきたのだ。

男の子が苦手な私だったけど巧くんの親友だから無条件に気を許し、4人で一緒におやつを食べて遊ぼうということになった。

ちよつとだけ砂遊びをした後、お母さんが用意してくれたお菓子とジュースを三時のおやつに食べた。

一人一人に十分な量を準備してくれていたのよ？

それなのにアイツは、自分の分をものすごい勢いで食べた後、食べるのが遅くて半分以上残っていた私のおやつを皿ごと掴んで、自分の口に一気に流し込んでしまったのだ。

呆然とその様子を見ている私を無視して、さらに私の飲みかけのジュースをごくごくと一気に飲みしたあと、それはそれは意地悪そうな顔でにやり、と笑った。

もちろん、その後手が付けられないくらい泣いたわよ。

その時の悔しさと悲しさ…それが私の人生で一番古い記憶の一つとなつて残っている。

その日から、小学校も巧く人と一緒だった虎之助は、何だかんだ理由をつけて毎日のようにうちに遊びに来るようになった。その度に虎之助に追い回され、奇想天外なイタズラに泣かされ続けたのだ。

ヤツのお陰で、私はすっかり” 同年代男性恐怖症 ” になった。

小学校卒業と同時に父親の転勤でヤツが転校した時、どれほどうれしかったことか！

「何でこんなところにいるのっ！？九州に引っ越したじゃないっ！」
「ああ。オヤジが本社に呼び戻されたから、中途半端な時期だったけど」

「こつちに帰って来たんだ」
「何も会いに来ることないじゃないっ！！あつ…アンタの顔なんて、見たくないんだからっ！！」
「ああ？俺にそんな口聞かわけ？ミニマムが？」

こいつはちびっ子だった私を” ミニマム ” と呼んで蔑んでいた。人気のRPGに出てくる小人になる魔法だと知った時、私の心はあまりの口惜しさに泣いた。
当時から、私に” 小さい ” は禁句だったのに。

腹が立つから言い返したいのに、条件反射とは恐ろしい。

虎之助の地面を這うように低く恐ろしげに響く声を聞いて、びくびくとして体が震えた。

巧くんの胸に顔を埋めたまま、ぶるぶると震えていた。

「お前ねえ…風花に会いたいって言うから連れて来たのに、怖がらせるんだったら

もう家に呼ばないよ？」

呆れたようにため息をついた巧くんが言った。

くくつと笑ったバカ虎は反省の欠片もない声で「わりいわりい」と謝った。

「二人とも、驚いただろ？」

巧くんがニコニコ笑いながら言った。

「虎之助、うちのそばのマンションに引越してきたんだよ。

今日からうちの学校に転校してきて、クラスも一緒なんだ」

虎之助は「どうぞよろしく」「なんていって敬礼してる。

誰がよろしくなんてしてやるもんかっ！

若干和やかになった雰囲気の中、虎の視線が私たち二人をじろじろと観察している。

…嫌な感じ。

「…まあそうなってんだろっなーって思ったけど、やっぱりお前達、くつついたのな。」

なに？そのお子ちゃま相手にキスぐらいは済ませてんの？」

なんですとっ！？

私と巧くんが…そんなっ…！

そっ…そんなこと、あるわけないじゃない！

驚いた私は反射的に叫んだ。

「つつ…付き合っってなんかないわよっ！

私たち、ふっつーに幼馴染で兄妹みたいなものだもん…っ…！」

なんて事言うのかしら？

人の気も知らないで、デリカシーのかけらもない男っ…！！

「…はあ？」

目の前には、目どころか口までかっぱりと開けた、お間抜けな虎之助の顔。

虎はびっくり顔のままぎしぎしと壊れたロボットみたいに首を動かして、巧くんを見た。

「巧…おま…っ…マジ？」

「まあ…マジ、だね」

「…この状況でもか？」
「…この状況でも、だね」

未だに巧くんの腕の中にいる私を指差す虎之助の指がふるふると震えている。

「巧…お前って…お前って…つぷ！」

がはははははっ！と虎の豪快な笑い声が響いた。

あまりの大音響と突然の出来事に、虎を見つめたまま呆然としてしまった。

ひーひーと苦しそうにお腹を押さえる虎が一頻り笑い終え、にやりと不適な笑みを浮かべて顔を上げた。

「お前、ほんつと、昔から押しの弱いやつだな〜！」

…つてことは、なに？俺にもまだチャンスがあるんだ？」

「…へ？なっ…なんのこと？」

何を言い出したんだ、この男は？

意味が分からなくて助けを求めるように巧くんを見ると、いつも優しい笑みを浮かべているブルーグレイの瞳が冷たく、鋭く光った。

私の背中に回されている巧くんの腕に、ぎゅっと力が入る。

「巧、俺ガキのままじゃねーから。今回は本気で行くからな？覚悟しろよ？」

「……心しておくよ」

二人の間で火花が散ったように見えたのは、気のせいだろうか？大人しく見守っていた更紗は、面白そうに目を細めている。

どういう状態に陥っているのかわかってないのは、どうやら私だけみたい。

「……ってことで、絶対に風花を俺の女にするからな！覚悟しとけよ？」

……
……

はい？

言いたいことだけ言って、虎之助は「じゃあな！」とのしのしと帰っていった。

「面白くなってきたじゃないの、巧？」

「うるさいよ、更紗」

ニヤニヤと笑う更紗に、心底嫌そうに顔をゆがめた巧くん。

私だけワケが分からず蚊帳の外だ。

俺の女って…なに？

怒涛の一日が終わって、無情にも訪れた翌朝。
私の心とは裏腹に、見事な快晴だった。

あのバカ虎のお陰で、試験勉強も思った以上にはかどらなかった。
もちろん、今日提出のレポートもへろへろ。
苦手な数学がすごく不安なのに…これ以上成績が下がってしまったら、どうしてくれるんだろう？
来年受験生なのになあ…

ため息つきながら階段を下りると、ダイニングには更紗と巧くんの姿があった。

「あれ？二人ともどうしたの？」

驚いていると、二人から同時に「おはよう」の挨拶が聞こえた。
カウンターキッチンの奥から、お母さんが睨んでいる。

「風花、朝起きたらまずは”おはよう”、でしょ？」
「ごめんなさい」

えへへと笑ってごまかして、二人に朝の挨拶をしてから座った。

「今日から2週間、母さん金沢の芸大で特別講習会の講師をやるんだって。」

だから、その間食事はここでお世話になることになったんだ」

「そうだったんだ。昨日何も言ってなかったから……」

「……昨日は言える雰囲気じゃなかったんだもの……それもこれも虎之助のせいね」

……虎之助……この名前だけで、心に暗いカーテンがかかったようだ。

「……その名前、朝から言わないでよ……」

涙目になった私のことを見て、更紗は何故か巧くんを見て「どうすんの、兄貴？」とニヤニヤ笑った。

巧くんはむっつりと不機嫌に黙り込んだ。

「ねえ、風花」

「なあに？」

「オレのともも試験1週間前で放課後の活動は禁止になってるし、放課後学校まで

迎えに行くから校門で待っててくれる？」

心配だからと真剣な瞳で言う巧くんは、お母さんは「巧くん、過保護すぎ」ってくすくす笑ってる。

心もち頬を赤く染めた巧くんはこほんと咳払いして、私に大丈夫？と視線で問いかけてきた。

私の答えはもちろん…

「うん！待ってるからっ！」

巧くんがいたら、怖いものなしたもの！

昨日の虎之助の様子だと、また子供の頃のように私をおもちゃにしていじめ倒そうとしているようだし。

正直、憂鬱で仕方なかったのだ。

巧くんがいてくれれば、虎之助に怯えることなく、家に帰ることが出来るっつものだ。

それに、巧くんが学校まで迎えに来てくれるなんて…初めて。なんだかちょっと、お付き合い、してるみたいじゃない？

そう考えると、途端に胸がどきどきわくわくしてきた！

「よかったあ、うれしいっ！」と巧くに笑いかけると、巧くんもドキドキするほど素敵な笑顔を私に向けてくれる。

どんな時も幸せな気分にしてくれるこの笑顔が、私は小さい頃から大好きだった。

「あなた達って…朝からほんつと、仲がいいわよね」

「ホント、お母さん見てて照れちゃうわ！」

「なっ…仲いいのは当たり前でしょ？私たち、家族みたいなものなんだし！」

恥ずかしい気持ちを隠してそういつと、巧くんは苦笑してお母さんと更紗は呆れた目で私を見た。

大体、お母さんも更紗も一言多すぎ！

私の気持ちが巧くんにはれちゃったらどうしてくれるのよっ！

「…なによ？」

2人を睨み返すと、大きくてわざとらしいため息が二つ。

「天然も、ここまでくると罪よね〜」

「ここまで鈍いと、巧がかわいそうになっってくるわ…」

ムカツとした。

いつもそうやって判らないことを言っ、私だけ子供扱いにするんだ。

ふん！いいもんね！

私は拗ねていることを主張すべく、わざとらしくっーん！と顔を背けた。

「風花、私ちよつと用事があるし、今日は巧と2人で帰ってくれる？」

いつも一緒に帰っている更紗は、学校から歩いて10分のところにある図書館に予約していた本を受け取りに行くらしい。

ちよつと残念だなあと思いながら、二人そろつて校門に向かった。

すると、何故か校門には小さな人ばかりが。

家柄のよいお嬢様も通っている学校なので、その婚約者や恋人である有名人がお迎えに来ることもあるんだけど。

だったら、遠巻きに見てるだけで、こんなにあからさまに取り囲んだりしないだろうし。

不思議に思っていると、更紗がぼそりと言った。

「…巧ね、きつと」

「へ？」

驚いて人垣の中心に目を凝らしてみると、確かに巧くんの姿が。頬を赤く染めた女の子達が、うれしそうに声をかけている。

ゆつたりと微笑み言葉を返す巧くんの姿に、つきりと胸が痛む。

「…つたく。この学校にもファンがいるって言うのに。」

外部からの子に巧との関係が知られたら…明日から騒がしくなり
そつで、嫌だわ…」

更紗がため息を付いたその時、巧くんが私たちに気付いて手をあげた。

「風花！…更紗も」

巧くんの極上の笑顔は周囲にいる女の子達を漏れなく魅了した。そして、その反動で私たちを睨みつけてくる視線の数々…いたたまれなかった。

「…あなたにとって私はついでのなのね？お兄様？」

棘を含んだ更紗の言葉に巧くんはばつが悪そうに苦笑した。

「…別に、そんな風には言ってないだろ？2人とも、帰るぞ？」

輪の中から出てきた巧くんは、自然に私のカバンを手から取り上げていた。

そんな態度に、さらに女の子達の視線がきつくなった。

…コワイ。

「私、図書館に寄らなきゃいけないから。2人で帰って頂戴？」

…風花、綾乃さんにおやつはいらないって伝えてね？」

「うん、わかった。気をつけてね」

「ありがと、風花。それじゃ、後でね」

更紗の背中を見送ってから、私は巧くんと歩き出した。

いつも二人で歩く時のように巧くんが私の肩に手を回した時、後ろの方で女の子達の悲鳴が聞こえたような気がした。

…気のせいだと、思いたい。

巧くんと一緒に帰るのはうれしくて楽しくて、とっても幸せな時間だけど、あの女の子たちの視線がオソロシかった。

明日…大丈夫かなあ？

巧くんと一緒だったせいかなんなのか、バカ虎に会う事もなく無事家にたどり着くことが出来た。

それになにより、巧くんと一緒に歩きなれた通学路を歩くのは、新鮮でドキドキした。

なんだか、とつてもラッキーな一日を過ごしたような気がする。ふかふかでお日様の匂いにする布団に入って、くすくすと笑った。

しばらくの間はこんな気分を味わえるんだ。それだけで、幸せだった。

私は温かい気持ちのまま、眠りに落ちた。

「ねえ、橘さんって、青風林の騎士様と一体どういう関係なの？」
「…まさか、お付き合ってる、何てことないわよね？」
「はつきり言いなさいよ！」
「…え、えと……」

何で私、こんなに恐ろしげなおねー様方に囲まれて、こんな人気のない体育館裏になんているんだろう？

”…巧のファンが騒がなきゃいいけど…”

昨日ぼそりと呟いた更紗の言葉がふと頭をよぎった。

この先輩方はきつと高校から入学してきた外部生で、巧くんのファンなのだろう。

内部生だったら、私たちの関係はわかってるはずだし。

それにしても、すごくきれいで、すごく大人びた人ばかり。
張り合えそうなのは、胸の大きさぐらい？

改めて巧くんの人気を突きつけられて、かなり凹んだ。

いつもこんなお姉さま方に囲まれてたら、私みたいなお子ちゃま、絶対に女として意識すらしてもらえない。

どもる私にイラついた先輩の一人が、きつと睨みつけて答えを催促する。

怖いよー！！

頼みの綱の更紗も、今は先生に呼び出されているのできつと助けに来てくれない。
何とか乗り切らねば…

「えと、ですね、巧くと私は、付き合っているとかじゃなくって、幼馴染、なんです」

「えっ！？」

「幼馴染…？」

「そうなのっ！？」

「…幼馴染でも、恋愛ってありじゃない！」

「いえ、私の場合…そんなことはなくて…」

「ないの！？」

私の一言で、何故か先輩方の瞳がキラキラと光りだした。

「そ、そうですっ。」

ほら！私…かなりお子ちゃまだし、妹みたいな存在っていうか…
巧くと更紗…長谷さんは、私が生まれるずっと前から仲良しなんです」

「…じゃ、長谷さんって…やっぱり騎士様の、妹？」

「そうです。巧くんの、双子の妹です」

恐ろしいな雰囲気が一気に消え去り、気味が悪いほど和やかな雰囲気になった。

…それはそれで、怖い…。

お姉さま方は突然フレンドリーになって、私の肩に手を回した。

…やっぱり、怖い。

「ねえ、お願いがあるんだけど…いい？」

「へ？」

「巧くん、紹介してくれない？」

「私たち、巧くんのが大好きで、お友達になりたいって思ってたの！」

いいでしょ？先輩と後輩のよしみで、ね？」

そういうのって、正直言つて苦手。

お姉さま方の気持ちはわかるけど、でも、そういうのに人を使うのってなんか卑怯だ。

それにやっぱり、大好きな巧くんを独り占めされたくない。

そういうの、卑怯だってわかってるけど。

でもやっぱり…好きだから。

返事に困ってうつむいている私に、お姉さま方は次第にいらつき始めた。

「ちよつとお、何なの？」

もったいつけてんの？いいじゃん、紹介するぐらいさあ！」

「ホントは、巧くん独り占めしたいって腹じゃないのお？」

「幼馴染の立場利用してさ！」

「昨日だつて肩に手を回してもらったり、荷物持ってもらったり！」

「幼馴染にしてはちよつと図に乗りすぎてんのよね！」

「ちよつとは自分の立場考えたら？」

「ふつー、おこがましいって思うでしょ？」

「そつよ！離れてよ！」

「使えねーやつ！」

どん、と1人に肩を突かれて、体育館の壁に肩を思いつきりぶつけた。
痛みに一瞬顔がゆがんだ。

1人が私の胸倉を掴んだとき、タイミングよく予鈴が鳴った。

お姉さま方が文句を言いながら、もう一度壁に私を突き飛ばして行ってしまった。

同じ箇所を再度打って、あまりの痛みに涙が滲む。

私はスカートが汚れることも気にせず、その場にずるずると座り込んだ。

「…やっぱり、似合わないよ、ね？」

他人から指摘されると、やっぱりへこむ。
二人が並んでも、全然恋人なんかじゃなくて、まるっきり大人と子供だ。

「おこがましい、かあ〜…」

図に、乗ってたかなあ？
幼馴染ってことに。

「…わかんない」

でも、大好きなの。

私はつずくまっただまま、立ち上がることができなかった。

本鈴が鳴ってから、なんとか立ち上がることができた私は、その足で保健室に向かった。

養護の高橋先生に左肩を見てもらったら、付け根辺りからかなり腫れているらしかった。

もともと線が細いせい、小さい頃からちょっとぶつけただけであざができてしまう。

かなり強く壁にぶつかったから、こうなっても仕方ないだろうな。

もうちょっと踏ん張れるぐらい足腰が強かったら、全体重で壁に突進することもなかったのにな。

今更運動系の体格にはなれないけど。

ずくずくと鈍く強く骨に響く痛みで、腕全体に力が入らない。

「うーん…これはちゃんとお医者さんに診てもらった方がいいわ。

ここ、痛いでしょ？」

先生が軽くぶに、と押しただけで、鈍い痛みが激痛に変わった。私は歯を食いしばり、涙をこらえた。

「ん、ほっぺがピンク色になってきてるし…ちょっと熱っぽいかも？」

このまま早退して、病院に行きなさい。

お母さん、今日おうちにいる？」

「あ、いえ。今日はちょっと用事で家にいなくて…」

「じゃあ、かかりつけのお医者さんは？」

「近所の笠原整形外科にいつも行ってます」

「それじゃ、これから先生に荷物持ってきてもらおうし、あなたは早退届けを書いて。」

学校からも近いし、私が病院までついていくから」

先生が内線すると、10分も立たないうちに副担任の先生が荷物を持ってきてくれた。

…よかった、副担任が女の先生で。

先生とはいえ、男の人に荷物を触られたくないし。

それより、更紗心配してるよね？

心の中でごめん、と謝った。

帰りの準備を整え、私は高橋先生と共に学校を出た。

歩くたびに肩がずきずきとリズムカルに痛む。

いつもの病院が、妙に遠い。

幸い病院は空いていたので、すぐに診てもらおうことができた。

診断結果は、打撲による捻挫。

1〜2週間はシップと包帯による腕の固定が必要らしい。

ふう、と安堵のため息をついた。

お医者さんに診てもらっただけで、なんだかましになったような気がするのなぜだろう？

家が近いということもあり、先生が家まで送ってきてくれた。

部屋でいつものTシャツとクロップドパンツに履き替え、枕とクッションを背中にかけて

ベッドの上で足を伸ばすと、天井に向かって大きなため息をつく。

思考は、全部お昼の出来事に向かっていく。

それにしても仲良くしようとしたり、いじわるしようとしたり、お姉さまたちの行動は理解不能だ。

ただわかったことは、先輩たちは巧くんのが好きで好きでたまらないってこと。

私だったらどうしただろう？

巧くと全然顔見知りなんかじゃなくて、どうにかして知り合いになりたいって思ってるのに手段がなくて。

遠くから見ることが苦しくなって、自分の想いを伝えたくて。

…それでも、巧くんのことを知ってる子をあんなふうに取り囲んで脅すような行為は絶対にしない。だったら呼び出して、正面からきちんと好きだと伝えたい。それでだめだったら…だめだったら、どうだろ？諦められる…？

私はぶるり、と震えた。

忘れるなんて、諦めるなんて、できるわけがない。だって、小さい頃から私には巧くんしかいなかったんだもん。

…ん、これじゃ幼馴染的発想だ。

”幼馴染の立場利用してさ！”

”幼馴染にしてはちょっと図に乗りすぎてんのよね！”

”ちょっとは自分の立場考えたら？
ふつー、おこがましいって思うでしょ”

胸が肩以上にずきずき痛む。

私、そうなのかなあ？

…そう、だよな。

いつもいつも巧くんや更紗、友達に頼ってばかり。
一生懸命しているつもりでも何かしら失敗して、それをフォローして
くれるのはみんな彼ら。

私は迷惑かけるばかりで、友達のために何をしてきただろう？
たいしたことできないで、それで友達面して…

「それって…さいてー、かも」

底なし沼に落ちたみたいに、どんどん気分が落ち込んでいった。

大人になりたい、何でも1人でできるようにになりたい。

そう言いながら、どんな努力をしただろう？

結局努力も結果も中途半端で、その度に「いいんだよ、風花はその
ままで」なんて微笑みかけて
もらうだけで満足して。

ホントは、もっともっと努力すべきだった。

でも私は弱いから、つい巧くんや更紗に甘えて頼ってしまっ。

この際、二人と距離を置いてみたほうが良いんじゃないかなあ？
頼る相手がいなければ、自分で解決しようともっともつとがんばれ
るだろう。

それにきつと私がいなければ、巧くんも更紗も私に煩わされること
はない。

幼馴染だって図に乗ってた私を、優しい二人はいつも許してくれて

る。

だから今度は私が頼られる人間になれば、二人ももつと気持ちが悪くなるはず。

私は痛む肩をするりと撫でた。

腫れとシップと包帯で、いつもの倍ぐらいの厚みがある。

このことも、ちゃんと一人で解決してみせる。

先輩方の誤解を解くぐらい、私にだってできるんだから。

それに、勉強だってなんだって。

今回のテストだって苦手な数学も物理も、自分の力で克服するんだ。教えてもらったりしないので、きちんと自分で調べて。

できるだけ一人で行動するようにしよう。

勉強だって、部屋で自力でがんばろう。

先輩たちのことは更紗に気づかれないように注意しなくちゃ。

誰にも頼らない。

自分ひとりでがんばる。

私は決意を新たにした。

4時頃、学校から帰ってきた更紗が部屋に飛び込んできた。

「風花？大丈夫？肩は？」

心配そうに私の顔を覗き込む更紗に、罪悪感が滲んでくる。そうでなくてもいつもいつも心配ばかりかけてることに、ドンと落ち込んだところだったから。

「なんかね、笠原先生に見てもらったら、打撲による捻挫だって。骨に異常はないし、大丈夫だよ？」

にっこり笑えば、明らかにほっとした更紗の顔。早くよくならなきゃ。

「それより、起きられる？」

巧はリビングにいるんだけど、風花のことすく心配してて……」

「うん、今行くから」

ベッドから起き上がろうとして、左肩に激痛が走った。

「風花！大丈夫！？」

「だ、だいじょぶっ！なんでもないからっ！！」

痛みで震える唇で、笑ってみせる。

更紗が奇妙な顔をしたけど…ちゃんと笑えてなかったかな？

更紗の後に続いてリビングに入ると、ソファに座っていた巧くんが慌てて立ち上がった。

「大丈夫？」と聞く表情が心配でたまらないって感じで、やっぱり申し訳なく思った。

笑顔で頷くと、私の頭をぎゅっと抱きしめる。

肩の怪我ごと私を気遣ってくれるやさしさに、弱い心がひよっこりと顔を出す。

私は右手で巧くんのシャツを握り、その胸に顔をうずめた。

巧くんは頭のとっぺんに数回キスを落とすし、それから私の両頬を両手で包み込んだ。

鼻に小さな音を立てたキスをして、その蒼い瞳でまっすぐに私の目を覗き込んだ。

「…なんで、こんな怪我をしたの？一体何があった？」

これまでにないほど真剣な、射抜くような視線に怯んだ。

私はごくくり、とつばを飲み込んだ。

「この問題は、きちんと自分で解決するんだ。

「巧くんや更紗には迷惑はかけない。」

先ほどの決意を頭の中で再び唱えた。

「な、なんにもないの！私がどじで、肩ぶつけちゃっただけだから！」

焦って早口になりすぎた？

巧くんが変な顔してる。

「風花：」更紗がため息をついた。

「あのね、高橋先生が言ってたんだけど…どうやったら、一人で体育館の外壁に

打撲で捻挫するほどぶつかるとわかるわけ？しかも背中から。

「だいたい、体育館の裏で一体何やってたの？」

「何の用事もないのに、行くところじゃないでしょ？」

「…誰かに呼び出されたんじゃない？」

どきり！！

心臓が大きな音を立てた。

私は追い詰められた羊のような気分になり、体中から汗がたらたらと流れた。

私の心を見通すように射抜く、青灰色の二組の瞳。

おいそれと逃げられない、そんな気がした。

でも！

ここで諦めたりしたら、二人に迷惑をかけてばかりの馬鹿な女の子のままで終わっちゃう！

私はぐつと歯を食いしばってから、にっこりと笑った。

「ま、まさか！そんなことなくて…なんとなく歩いてたらあそこにいて、で、なぜか何かにつまずいて…一体どうなってこうなったのか…わからないの」

疑いに満ちた二人の視線が痛い。

「ほっ！ほんとよっ！ほんと、ほんとっ！だから、大丈夫！気にしないで！？」

さらに必死に駄目押ししてみる。

その必死さ加減に呆れたのか根負けしたのか、二人はため息をついて了承した。

難局を乗り越え、私はあからさまにほっとした。

けれど、それから帰ってきたお父さんもお母さんもおじいちゃんもエドワードさんも、次々に私を質問攻めにし、競うように甘やかしてくれた。

これが当たり前って思ってたけど……改めて自分が人に頼り切ってたんだと反省仕切りだった。

もっと大人にならなきゃ。

漠然とした焦りが私の中でどんどん大きくなっていった。

翌朝、3人一緒に朝食を食べてから、学校に向かった。

いつもと同じ風景だけど、もしかしたらどこからかあのお姉さま方が見てるんじゃないかと思うと、怖くて仕方がなかった。

いつもより元気がない私に、二人は肩が痛みが原因だと勘違いしたみたい。

しきりに声をかけてくれるのが、余計に辛かった。

「そういえば、今日は何時ぐらいに終了？良い時間に迎えに行くから」

ぼんやりしている私に、巧くんが言った。

私はぽかん、と巧くんを見つめ返した。

お迎え……………だめ。

だめだ、そんなことしたら…

「あ、あのっ！わ、私、今日だって、これからだってひとりで帰れるから！」

「いいよ、巧くんも大変だし、気にしないで？」

「でも風花、その肩のこともあるし…」

「大丈夫！私、子供じゃないんだよ？」

幼馴染だつて言うだけで二人に迷惑かけるなんておかしいし、肩の怪我だけだからちゃんと

あるけるんだから！」

「風花？迷惑とかじゃなくて、オレが来たいから来てるんだけど…風花のこと心配だから」

「巧くんが心配することなんて、ないんだよ？だって、私が悪くて怪我したんだもん！」

だからちゃんと、大丈夫！」

自分のことは自分でできるから！いつまでも子供じゃないから！」

必死になって訴えたら、巧くんがなんだか辛そうな顔をした。

あれ？と思っっていると、「…わかった。もう迎えに来ないよ」と言っつて背を向けた。

いつにない巧くんの行動に慌てた私は、更紗の方を見た。

更紗は複雑な顔をしたまま大きなため息をつき、「行きましょう」と私を促して学校に向かって歩き出した。

心の中で何かがちくと刺さったような気がした。

” 迎えに来なくてもいいよ ” 宣言をしてから、巧くんは言葉通り迎えに来なくなつた。

それどころか、朝も夕方も「用事があるから」とうちにも来なくなつたし、そのせいで滅多に顔を合わさなくなつた。

きつと怒らせてしまったんだと胸が痛み、嫌われてしまう、嫌われたんだと恐怖した。

こんな状態だからテストはぼろぼろ、結果も見たくないほど。なにやっつてんだ？とドン、と落ち込んだ。

この状況にもうくじけてしまいそうな自分が情けなかった。

もう何のためにこんなことをしているのか、わからなくなつた。

こんな関係を望んだわけではないのに。

お母さんたちも私と巧くんの様子が変わたと気づいていたけど、何も言わずに見守ってくれている。

更紗も心配そうにしてるけど、無理に聞き出そうとせずにもいつも通り接してくれた。

私一人の態度が妙になつたから、家族みんながみんなぎくしゃくしてる。

それなのに、誰も私を責めたりしつこく理由を問い質したりしない。みんなの優しさに少し苦しくなり、私は相変わらず出口のない迷宮

をさまようようにぐるぐる悩み続けた。

大切な家族を巻き込んで、自分の身勝手に全てをぶち壊してる。

何のために？

何のために？

何のために？

何度問い直しても、胸の中がもやもやして、従順な部分と頑なな部分はずっとけんかしてた。

あのお姉さま方からの呼び出しは、あの日以来なかった。けど、廊下ですれ違うたび、登校するとき、いろんな場所、いろんな時に見かけた。

その度に睨まれたり、嘲笑されたり、「…身の程をわきまえなよ」とすごまれたり。

更紗がいけないときにだけ行われるアプローチは、一回一回はたいしたことないことなのに、時間の経過や回数を重ねることに心身を疲れさせた。

なんだか、自分がずいぶん取るに足らない、どうしようもない人間なんじゃないかって思えてくる。

突き詰めると生きていても意味がない、みたいな。

最初、体育館裏に呼び出された衝撃は少しずつ薄らぎ、あどきに

極限まで思いつめた気持ちは漠然としてきて、疑問が混じり始めた。肩の捻挫は、少しだけ違和感があるけど、ほとんど治っている。痛みが消えてきたから、あこれこ浮かんでは消えていく考えが増えしてきた。

私は、判断を間違っているのかもしれない。

人に頼らない、一人でがんばるという気持ちの合間に、そんな考えが見え隠れしていた。

あんまりに混乱してきて、私の身に何が起こっているのか問いたそうにしている更紗に、全てをぶちまけてしまいたくなる。けれど、何も言わない。

……何もいえない。

ここまでみんなを振り回してる人間が、どの面下げて悩み相談なんかできるだろう？

それに、またみんなに甘えてしまう。

ここまでできたら、きっちり自分で答えを出す。

意地になっていと言われれば、その通りだろう。

でも、いろいろな意味で、このままじゃダメだと思う。

結局私は自分の心が感じてることを踏みにじり、頭で考えたこと…

というより恐怖や弱さを全面的に選んだんだ。

私は、弱い人間だから。

守ってもらってるばかりの、ダメ人間だから。

……

……ほんとに、そうなの？

私って、そこまで弱いダメ人間、だった？

役立たずだった？

何でこの考えにしがみついているの？

今日と明日は更紗に用事があり、1人で下校することになっている。心配そうにしていたけど、私が1人で帰ると言うと、更紗は「わかった」と頷いた。

そのやり取りがなんだかよそよそしくて、寂しかった。

いつも楽しくおしゃべりしながら通る道も、1人で帰ると味気なかった。

せみの声、青い空、輝くような濃い緑、刺すような太陽の光。

こここのところ天気がよかったから、カラッとした空気を汗ばんだ肌を感じる。

ずっと吹き渡る風が心地よい。

「もう夏だね〜！」なんて笑いあえる大好きな人がいないと思うと、風景もきらきら輝いて見えない。

気持ちを共有できる相手がいなければ、美しい景色もただの舞台装置だ。

泣きそうになった。

いつもの公園の前を通りかかった。
うな垂れたまま、のそのそと足を運ぶ。

「おい、俺様を無視か？このミニマムめ」

聞こえてきたのは、久しぶりに聞く天敵の声。
あれほど嫌悪したのに、もうどうでもよくなっているから不思議だ。

私は顔を上げ、虎之助を見た。
虎之助の片方の眉が上がる。

「…なにか用？」

「…なんか、調子狂うよな」

「用事がないんだっいたら、私帰るから」

「ちよつと顔貸せ。話がある」

「…私はないから」

そのまま無視していこうかと思ったら、虎之助に手首を掴まれた。
そしてそのまま公園に連れ込まれる。

「…で、何があった？」

無理やり木陰のベンチに座らされ、尋問まがいの質問が上から降ってくる。

「別に何も無いもん」と答えると、鼻で笑われた。どこまでも失礼なやつだ。

けれど、それを指摘する気にもならない。

「何もねーワケねーだろが。だったら巧があそこまで荒れたりしねーっつーの」

「…巧くん？」

「そ。せつかくお前いじり倒してアイツからかってやるつもりだったのに、

これじゃ全然おもしろくねーし」

「私、おもちゃじゃないし」

「俺にとってはそーなの。」

お前はあの巧を翻弄できる、唯一の人物だからな」

「…そんなこと、あるわけないでしょ？」

巧くんにとって私は、出来の悪い妹みたいなものだし」

仏頂面のまま、膝に頬杖を付いて正面を見ながら言った。私のことで機嫌が悪くなるなんてありえないから。

「ほんつっと！お前、無自覚の超・鈍感のお子ちゃまだよな〜？」
「なんですってっ！？」

その言葉にイラっとして、虎之助をにらみつけた。
そして、驚いた。

こんな真剣な虎之助の顔、初めて見たかも。

「あのなあ。今の巧、親友として見てらんねーワケ！

アイツがあんなにイライラして、落ち着きなくて、人を寄せつけ
ねーのは、

絶対に傷ついてるからだ。

あの自信過剰で出来過ぎの男が落ち込むっつーたら、お前以外ど
んな理由が

あるってんだよ！

いい加減分かれよ、ぶあくかつ！！」

虎之助に真正面から巧くんを傷つけたのは私だと指摘されたことで、
何とか保っていた平常心がどっと押し流された。

もうどうしていいのか、何を考えて良いのかわからない。

止めようと思っても全然止まらない、滝のような勢いで涙が溢れ出
す。

ぎよっとした顔で硬直した虎之助を見て、少しだけざまあみろと思
った。

「お、おい…そんな、ガキみたいに泣くことねーだろうが…」
「ガキガキ言うな〜っ！そうよ、どおーせ私はガキよ！ガキっ！
1人じゃ何にもできなくて、いっつもみんなに迷惑かけて、守っ
てもらってっ！」

そのくせ何にもお返しできない、どうしようもない人間だもんっ
！」

「…はあ？」

「幼馴染で小さい頃から一緒にいるから、お情けで一緒にいてくれ
るだけだもん。」

手のかかる馬鹿な妹だから…だからっ…、ホントは、もう、迷惑
だって、邪魔だって

思ってるのに…っ、巧くん、や、やさしい、からっ！

わっ…私っ！おこがましいんだもんっ！凶に乗ってんだもんっ！
！」

言いたいことを言うだけ言って、うわ〜んっ！とありえないほどの
号泣モードに突入した。

八つ当たりだっってわかってる。

わかってるけど、もう、私の中にこれ以上のストレスは留めること
はできなくなっていた。

啞然としていた虎之助は、そのうち挙動不審になり、それからため
らいがちに私の肩に手を回し、かばんの中から取り出したよれよれ
のスポーツタオルを私に押し付けた。

それを引つつかむと、涙を止めるように目にぐっつと押し付けた。

思いつきり鼻をかんだら、「…きったねえなあ〜。それ、お前にや
るから」とうんざりした声で言った。

やっぱりこいつはやさしくない。
だいたい、こんなよれたタオル、私だって欲しくないもん。
それでもここはお礼を言うべきだ。

泣き叫んだことでちょっと落ち着いた私は、タオルから目だけをのぞかせて「…ありがとう」と言った。

「…おう」と若干赤くなった頬で虎之助が答えた瞬間、彼が後ろに吹き飛んだ。

情報処理ができずに茫然としていると、体がぐつと後ろに引かれ、強い力で抱き上げられた。

この感覚、匂い…。

「たっ…巧くん!？」

体をひねって見上げたら、人でも殺しそうな視線で前方を睨みつけるのが見えた。

こんな怖い巧くん、初めて見た。

涙なんてすっかり引っ込んでしまった。

「…あいたたたた……ひつでえなあ、巧」

虎之助のうめき声が聞こえ、再び前方を見た。

すると突然体の向きを変えられ、巧くんの胸に顔を押し付けられた。わけのわからない態度に、不安感がいや増す。

「…なんで虎之助が風花と一緒にいるんだよ！」

「行きがかり上、こうなったただけだ。別にお前に言い訳しなきゃならねえことなんてねえよ」

「風花、泣いてるじゃないかっ！お前が泣かせたんだろっがっ！」

「ちげえよ。話してたら勝手にこいつが泣き出したんだよ」

「…風花、ホント？」

頭の後ろに当てられた手を緩められ、私は巧くんを見上げた。灰青色の瞳の中に、たくさんの感情が込められていた。

怒り、不満…不安？

いつもは穏やかな表情しか見せなかった巧くんの激しい感情に、戸惑った。

とにかく宥めなきゃ。

「あ、あのね…そうなの、私がね、勝手に、話し聞いてもらって、キレて…大泣きしちゃって…」

必死になって説明するのに、話すことに巧くんが無表情になっていく。

…どうしよう。

わかってもらえない。

絶望的な気持ちになって、言葉もとまってしまった。せっかく止まった涙がこみ上げてくる。

いつもならぎゅって抱きしめて慰めてくれるのに、巧くんはさっきよりもずっと冷たい顔で私を見下ろしたままだ。ぼろっと涙が一滴こぼれた。

「…何で？」

巧くんの顔が辛そうに歪んだ。

「何で虎之助なの？何でオレじゃないの？」

風花が頼れないほど、俺、頼りない？

風花、すんげえ悩んでたのに…俺には相談できなくて、虎之助にはできるの？

ずつとずつと一緒だったじゃないかっ！

何でオレじゃないんだよっ…！」

え？っと思つた時には、唇に強い刺激を感じた。

巧くんにキスされると気付いたときには、彼の舌が私の口の中で荒々しく動き回っていた。

巧くんのことが恋愛感情から好きだって気づいたときから、巧くんとこの恋人同士のキスは

どんなだろう？とずつと憧れ、想像してた。

でも、こんなに怖くて、痛くて、辛いなんて思ってもみなかった。まるで罰しているようなキスには、甘さなんて欠片もなかった。

襲ってくる自分に対する憐憫。

何で私が？私ばかり？

心の暗闇に吸い込まれていきそっだ。

……違う。

……違う違う違う！！

悲しむのは自分に対してじゃない！

こんなことで折れちゃダメだ！

私はぐつと体に力をみなぎらせた。

巧くにこんなことさせちゃダメ！

絶対に、絶対に巧くん、傷つく。

私を傷つけたからって。

そんなこと、絶対に許さないんだから！！

私は巧くんの腕から逃れようと、必死になって身をよじり、腕を突っ張った。

その拍子に巧くんの歯が唇にあたり、口の中は血の味でいっぱいになった。

突然唇が解かれた。

ぬくもりが消えたことにほっとしながらも、巧くんの唇が恋しくて、寂しかった。

どんなでもいいから、ずっと触れていて欲しかった。

どんな巧くんも、丸ごと全部受け止めていたかった。

それほど彼のことが好きなんだと、改めて実感した。

巧くんはやっぱり傷ついて、まるで泣き出しそうな表情をしていた。小さい頃と同じその顔を見ると私の胸は辛くて辛くて、穴が開いた

みたいに痛かった。

後悔が後から後から押し寄せてくる。

「……悪かった」

そう言っつて、巧くんは走り去っていった。
追いかけてよとした私を、虎之助が止めた。

「今行つてもダメだ。アイツ、素直に聞けないし、自分ばかり責めてる。」

もう少しアイツに時間をやれ。

アイツのことだ、ちゃんと状況が見えるようになるよ」

私はもわもわと腫れぼったい唇を押さえたまま、へなへなと座り込んだ。
んだ。

血の味は相変わらず消えず、鮮明に残っている。

まるで巧くんの心から流れている血のように思えた。

私は肩を震わせ、静かに泣いた。

私が泣き止むと、虎之助は私の家のそばまで送ってきてくれた。途中私にくれたタオルを取り上げた彼は、近くのゴミ箱に投げ捨てた。

もらっわけにはいかないから、そうしてもらえるとありがたかった。

家に帰ってご飯も食べずに部屋に立てこもり、一生懸命に考えた。自分がどうしたいのか。どうすればいいのか。

私が大切にすべきは、無責任で独りよがりな人たちの価値観ではない。私を愛し、思いやり、見守ってくれている、愛すべき人たちの心だ。そう結論付けると、迷いは全て吹っ切れた。

「もう、逃げないもん」

ようやく答えが見えたような気がした。

翌日、4時間目が終わってから、体育館の裏に行った。

休み時間に偶然お姉さま方とすれ違い、いつもと同じように嫌がらせを言われた時、放課後体育館の裏に来るように伝えたのだ。

今日はたまたま更紗は用事があるから、都合がよかった。

今日を逃せばきっと彼女たちと話をする機会はなかなかやってこないだろう。

しばらく待っていると、4人そろって現れた。

美人が怒ると怖さが倍増すると言う意味がよくわかる光景だった。

「別にさあ、私たちもあなたに話があったからいいけど。」

…自分から先輩呼び出すなんて、いい度胸だね？」

じりじりと近づいてくる姿に、思わず怯んでしまう。

痛みが消えたはずの左肩がずきずきしてきた。

けど、ここで怯んでしまったら、今まで悩んできたことが水の泡になる！

私は歯を食いしばり、ぐつとあごを上げた。

4人は私を見下すようにニヤニヤ笑いながら見ている。

私は息を大きく吸い込み、言った。

「もう二度と、私にくだらない嫌がらせなんて、しないで下さい」

一瞬にしてお姉さま方の表情が怒りで歪む。

こんな表情平気でする人、美人だったって巧くんが好きになるはずない。

意地悪くそう考えた。

「なに？生意気じゃね？」

「なにはむかつちゃってんの！？あんた、何様！？」

「先輩方こそ、何様ですか？」

私は、先輩方にわけのわからないこと言われるためにいるわけじゃありません」

「この馬鹿、ムカつく！死ねっ！」

1人が私の肩を思いつきり押した。

ふらふらとよろけたけれど、何とか転ばずに済んだ。

今やお姉さま方は全員般若の面をつけているかのようだった。

怖い。

けど、負けないもん！

私も睨み返すと、また1人が噛み付いてくるみたいに口を開いた。

「あんだでしょ！？巧様の妹に私たちのこと無視するようだったのっ！」

この薄汚い卑怯者っ！」

「何のことだか、わかりません」

「しらばっくれるなっ！」

こつちがやさしく声かけてんのに、長谷さん、全然無視してんのよ！？

…あんたがなんか言った以外考えられない」

私はその理論に啞然とした。

「それは、更紗にだって友達を選ぶ権利があります。

巧くに近づきたいからって理由で声かけてくる人間は、更紗が嫌いな人間だから…」

「黙れっ！この勘違い女っ！」

「お前こそいやらしいゴマすりだろうが！」

たいした人間でもないのに、ずっと長谷さんにくつついて！」

「自分が幼馴染の特権持つてるとか、思っちゃってんじゃないの？
ばあゝか！お前なんか、すぐに捨てられるっツーのっ！」

私の中の何かがぶちつと切れた。

私は生まれて初めて他人に向かって怒鳴りつけていた。

「だからなんですか！？私はお腹にいる頃から二人の近くにいたし、二人のことが大好きです！」

たとえばあなたたちが私と二人じゃ格が違う、似合わないと思っ
ても、

その関係が変わるわけじゃありません。
だって、私たちずっと仲良しで、家族みたいに暮らしてきたんだから。

特権とかそういうのじゃなく、私たちにとっては当たり前のことですから」

ぎりぎりとお歯をかみ締める先輩たちの顔一人一人を見た。
何も恐れるものなんてなかったんだ。
私には大切な人がいるから。

「私は巧くんが好きです。」

それは恋愛対象としてっていうのもあるけど、家族として幼馴染として

大好きです。

とっても大切です。

もし私が巧くんにとって恋愛対象じゃなくても、それは哀しいことだけど、

でもずっとずっと家族であることには変わりありません。

私は巧くんに幸せになって欲しいです。

だから、どれだけ辛くても、巧くんの幸せを願います。

苦しいのも辛いのも、全部全部私の感情だし、私が何とかすべき問題です。

あなたたちだって同じです。

私が巧くんに似合わないって言うのも、私が隣にすることが気に入らないのも、

巧くんや更紗があなたたちを友達に選ばないのも、全部あなたたちの感情の

問題です。

…巧くんのことを考えているように言ってるけど、全部自分が好きだから

じゃないですか。

だって、あなたたちの気持ちを満足させるためには、巧くんや更紗が

愛してやまない家族をめちゃくちやに壊してしまう結果になるんですから。

そんなことを望む人、あの二人は絶対に好きにならないし、認めるわけが

ありません！」

ヒートアップして言い過ぎたと思ったのは、彼女たちの顔が怒りで真っ赤に染まっているのを見てからだだった。

それが本音であればあるほど、人は腹を立てるものだ。

痛いところを付けば付くほど、許せなくなるものだ。

私は自分の迂闊さに腹が立った。

修復不可能だ、これは。

そう考えた瞬間、頬を思いっきりひっぱたかれた。

女子の力もすごいんだ、と現実逃避するようにぼんやりと思った。

目の前に星が散り、よろけて地面に横倒しに投げ出された。

ツインテールの片一方をぐっと引っ張られ、頭がのけぞる。

髪がぎしぎしいつてる。

痛い！

涙が滲んできて、目の前がぼやけてくる。

「離して！」と叫びながら抵抗するのに、げらげら笑う彼女たちはうれしそうに私を蹴り続けた。

そのうち私をいたぶることが愉快で残虐な遊びとなり、彼女たちの1人が楽しいことを思いついたとばかりに表情を輝かせた。

「ねえ、服剥いちやってさあ、写メ撮ってネットで流さない？」

「…やっちゃっ？」

「…ねえ？」

「やっ！…ヤメテッ！！」

そんなの、殴られるよりもたちが悪い！

絶対にヤダっ！

逃げなきゃ！！

必死になって暴れまわったけど、彼女たちにブラウスをひっぱられ、ボタンが引きちぎられた。

リボンは地面に落ち、ニットベストが伸びる。

髪の毛はほどけ、汗ばんだ顔や首筋に髪の毛が絡みつく。

なんで？

なんでこんなことになったの？

なんでこんな目にあわなきゃいけないの？

涙が滝のように流れ落ちた。

「…風花っ！お前らっ！何やってんだっ！！」

彼女たちを突き飛ばし、私を救い上げる力強い腕。

「た…っ、たくみ、くん？」

「バカヤロウ！ただけ心配かければ気が済むんだっ！？」

風花、風花と私の無事を確かめるように、何度も何度も名前を呼んで強く抱きしめた。

刺すような痛みが襲ってきて、「いたっ！！」と叫んでしまった。ゆっくりと腕を緩め、私のむき出しの腕や顔をチエックした巧くの顔が怒りにゆがんだ。

「お前らか…！」

突き飛ばされて呆然としていた彼女たちが、真っ青な顔で後退さった。

「だって、長谷君…私たちは…」

「何も言わなくても良い。」

風花をこんな目にあわせた理由など、聞いたところで腹が立つだ

けだ。

…正直、俺が直接手を下せないことが残念でならないよ。
女だろつが容赦したくないし、お前たちを二度と見れない顔にし
てやったら

少しは気持ちがすつきりするだろつしな」

「そ、そんな！私たちは、そんなんっ！」

「…そこから動くなよ？逃げようなんて思うな。
ちゃんと落とし前はつけてもらっつからな？」

遠くからばたばたと足音が近づいてきた。

「巧っ！ちよつと、どうし…ふ、風花っ！？」

「どうしたんだね、長谷君…っ、これはいつたい…何があつたん
だ！？」

更紗と生徒会顧問の小林先生だった。

二人は驚いて私たちを見つめていた。

「彼女たち、よつてたかつて風花を殴り、蹴り、服を引きちぎつて
たみたいです。」

…なんで服なんかちぎる必要があつた？」

「あ、あの…ち、違っんです！」

「何が違っんだ！正直に言いなさい！！」

体育会系の小林先生の一括は何よりも恐ろしい。

びくりと震える彼女たちは先ほどの勢いも消え、めそめそと泣き始めた。

そのうちの1人が足元に落とした携帯を拾った先生の顔が、怒りにゆがんだ。

「…これは、どういうことだ？説明してみろっ！」

そこにはみんなに引つ張られたベストとブラウスを必死になって押さえる私が写っていた。

先輩たちの手しか写っていないところを見ると、本気でネットに流すつもりだったんだと今更ながらにぞつとした。

「…全員生徒指導室に来なさい。」

橘、お前は保健室へ。

長谷妹は橘に付き添ってやってくれ。

兄の方は、話し合いが残っているが…」

「いえ、僕がいなくても、合同文化祭のミーティングはできるはずですから。」

僕は妹と共に風花についてます」

小林先生は「みんなに伝えておくから」と頷いた。

「橘。ひどい目に遭ったな…」

長谷兄の眼を信じて、もっと早くに駆けつけてやればよかったよ。悪かった。

…落ち着いたら、話を聞かせてくれ」

私は巧くんの胸に顔をうずめ、小さく頷いた。

彼女たちが連れて行かれた後、巧くんが自分のシャツを脱いで私に着せ、それから軽々と掬い上げた。

更紗は私を見てぼろぼろと泣いている。

泣くなと巧くんにたしなめられ、両手で目を覆いながら更紗が頷いた。

「…もう大丈夫だよ、風花」

その一言を聞いた瞬間目の裏から暗闇が訪れ、私はそのまま意識を失った。

どこか遠くで私の名を呼ぶ声が聞こえたような気がした。
なんだか体がだるくて、重くて、起きたくなかった。

嫌だと伝えたくて首を振ると頬が撫でられ、また「風花、風花…」
と呼ばれた。
すごく嫌だったけど、ゆっくりと目を開けた。

途端、体中がずくん、ずくと脈打っているような鈍い痛みが全身
に広がった。

「…う…っ、い、た…」

うめくように呟くと、わっと泣き出す声が聞こえた。

あ、あれ？

私…？

「…おかあ、さん？おとう、さん、も？」

あ、れ？…みんな、ど、したの？」「

口がもわんとして、動きにくい。
少ししゃべっただけなのに、口の中に血の味が滲む。
痛いし、だるいし、重い……。

どうやらここは病院で、私は個室で点滴を受けていたようだ。
恐る恐る首を横に向けると、お互いに抱き合って泣いているお母さんとお梨絵さん、ほっとした様子のおじいちゃんとお父さん、ギルバートさんが見えた。

「た、たくみ、くん？さ、ら……？どこ……？」
「ここだよ」

ぎゅっと大きな手が私の手を握ってくれた。
反対側を向くと、目に涙を滲ませた巧くんと子供の頃みたいに大泣きしている更紗が見えた。

「…わ、私……」

あれ？
一体何があったんだっけ……？
記憶が一瞬混乱し、それからゆっくりと絡まった紐がほどけるように昼間の映像が流れていった。

そっだ、私。

体育館の裏に呼び出して先輩たちと話をし、それから言い過ぎて怒らせちゃって、ひどい目に遭って…。

あのときの恐怖が蘇り、がたがたと震えだした。

お母さんと由梨絵さんが私に覆いかぶさるようにして、「大丈夫、もうなんにもないのよ?」とやさしく語りかけてくれる。

右手を握っていた巧くんが、ぎゅっと力を入れた。

みんなの顔を一人一人じっくりと目で追っていく。

おじいちゃん、お父さん、お母さん、由梨絵さん、ギルバートさん、更紗、そして巧くん。

みんなのやさしさのこもった目が私の恐怖で凍りついた心を溶かしてくれる。

喉の奥がぎゅっと詰まって、目からどんどん涙が溢れてきた。たくさん泣いたはずなのに、とまる気配すらない。

「う、うえええ〜ん…」

まるで子供の頃と同じように、ベッドに仰向けになっただま泣いた。

たくさんの手が伸びてきて、頭や髪、手を優しくなでさすってくれる。

ここにいれば安心。

ここが私の家。

私の家族。

私の大切な人たち。

それだけで無性にうれしくなった。

絶対に誰からも奪わせないし、私自身の弱さで壊したりもしない。
守っていくんだ。

ひとしきり泣き終わった後、お父さんから私が巧くんに抱っこされたまま気を失ったこと、それから救急車でこの病院に連れてこられたこと、病院と巧くんから連絡が入り

みんな仕事を放り投げて駆けつけてくれたことを話してもらった。

「…迷惑かけて、ごめんなさい」としゅんと俯くと、「ばかだな」
ってぼんぼんと頭を撫でられた。

私に何があったのか、おそらく学校から話が入っているだろうに、みんなは聞かずにいてくれた。

今は…特に巧くんがいる状態では、この話は聞かせられなかった。
どう話したら良いのか、どう言っても巧くんを傷つけてしまうことが辛かった。

覚悟ができていない今は、とてもありがたかった。

しばらくして、お医者さんが入ってきた。

お母さん以外のみんなが廊下に出ている間、診察してもらった。

頭に怪我をしていなかったし、貧血気味で寝不足で疲労気味だった状態でシヨックを受け気を失ったのだろうとのこと。体のあちこちにあざがあるけど1週間もすれば消えてくるし、叩かれた頬も腫れが明日にでも引いてくるって。

体調も落ち着いているし、今日は入院せずに帰って良いとのことだった。

早く家に帰りたいたいと呟いたら、すぐにでも準備してもいいよ、と先生が笑いかけてくれた。

先生が出て行ってから、私はお母さんが用意してくれた服に着替えることにした。

病院の入院着を着ているのを見て、「お母さん、私の制服は？」と聞いた。

お母さんの目が一瞬苦しそうに揺らぎ、「捨てちゃったわ」と困ったように笑った。

腕や背中にも打ち身があるみたいで、服を脱ぐのも着るのも一苦勞だった。

お母さんが持つてきてくれた前開きのワンピースはナイスな選択だった。

もうこれ以上痛いのはごめんだと思った。

それにしても、制服。

ああ、そうか。

きつともうぼろぼろになっちゃったんだ。

私はぼんやりと宙を見つめた。

「…制服、大切に着てただけだな……」
「…風花……」

胸が痛くて、痛くて、痛くて。

気づけば私はお母さんにこれまでのことを話していた。

「お母さん、私…ずっと前に先輩たちに呼び出されて、巧くん近づくなつて言われて。」

怖くなって、でも自分で解決しなきゃって思って……」

「…なんでそう思ったの？」

「…私は、一緒にいる資格がない、巧くんや更紗に迷惑かけてる、おこがましいって言われて、ああそうなんだ、私はダメ人間だっ
て思っちゃったの。」

いきなり突き飛ばされて…肩が痛くて、怖くて、怖くて。

…こんなことされたのも自分が悪いんだって考えてた。

だから1人にならなきゃ、がんばらなきゃって。
二人に嫌われたくない、軽蔑されたくないって。

…でも、そんなの間違ってるってわかったの」

「…そう」

「それを言うために、先輩たちに体育館の裏に来てもらったの。
初めて先輩たちに呼び出された場所で、ちゃんと決着つけたかっ
たの。」

そうじゃないと二人との関係どころか、家族みんなに辛い思いを
させて

みんなとの関係もぐちゃぐちゃにしちゃう。
そんなの、絶対に違うから」

「そうね」

「もう意地悪しないでって言ったの。迷惑だからって。そんなことされる筋合いはないって。」

最初は冷静に話してたけど、だんだん腹が立ってきてきて…私、きついこと言ったの。」

そしたら先輩たち怒り出して、突き飛ばされて、頬を叩かれて、うずくまったら

蹴られたり、髪の毛引っ張られたり…」

「……」

「でも我慢できたの。痛くても、自分が言い過ぎたからって。」

ホントは、怖くてたまらなくて、何も出来なかったただけけど。」

けど、先輩の1人が制服を脱がせて携帯で撮って…ネットに流しちゃえって…」

私、そこで我に返って必死で抵抗したの。」

だってそんなの…！

……そんなことされたら、私…生きていけない……」

「風花っ!!」

私はお母さんが広げた腕の中に飛び込んで、震えながらしがみついた。

「…こわかったよお…おかあさん……」

「もう大丈夫、大丈夫よ…みんなあなたのそばにいるわ。」

…もしみんなに何かあったとき、あなたもそうしてくれるように」

家のベッドに寝かされて、ようやく気持ちが落ち着いてきた。

夏の始まりは日が長くて、まだまだ外は明るいけど。

本当に長い、長い一日だった。
しみじみと思った。

家に帰ってから、みんながリビングではたばたしてた。

学校にも連絡してくれたみたいで、帰宅してからはしばらくしてうちに校長先生、担任、副担任の先生がやってきて、頭を下げていった。もう、こっちが恐縮するぐらいに。

先輩方の処分はまだ決まっていらないらしいけど、あれからすぐに全員自宅謹慎を言い渡されたそうだ。

グループの中の1人が両親と一緒に謝罪に来てくれたそうだけど、私は会わなかった。

謝罪をしようとしてくれることは良いことだと思っけど、でもまだ受け入れられない。

まだ先輩たちの顔を見る勇気も、あの状況と向き合う根性もなかった。

先生が夏休みまで後3日しかないから、3日間は家で休んで夏休み

の間に落ち着いてくれたら良いって言った。
それもそれで寂しいけど、でも学校に行くのは正直怖かったから、
とてもありがたかった。

しばらくは、気持ちを落ち着けたい。
ちゃんと向き合えるように、休息がほしかった。

夜、更紗が部屋に来てくれた。

もっと早くにきてくれると思っていたのにつて言ったら、「休んでるところ邪魔しちゃ悪いから」だって。

私たちの間で遠慮なんて、なんか変だ。

そう伝えると、「そうだね」と更紗の肩の力が抜けた。

更紗の目を見たら、真っ赤に腫れ上がってた。

きつとずいぶん長い間泣いてたんだろ。

小さい頃の更紗は滅多に泣くことはないけど、泣き始めたらいつまでもぐずぐずしていた。

大きくなっても変わらないんだなあ、なんだかうれしかった。

「…それにしても、驚いたわ。

風花が何か悩んでいるってことはわかってたけど、まさかこんなことに

巻き込まれてるなんて。

何で相談してくれなかったの？」

「そ…それは…」

「って、いいのいいの！」

私だって風花と同じ立場だったら、きつと同じことしたから。ちゃんとわかってる。

…ただ、風花が困ってるときに全然役に立たなかった自分に腹立たしいだけ。

ごめんね…私…」

「更紗…」

どうしよう、私、更紗をとことんまで傷つけた。
後悔が次から次へと襲ってくる。

私1人だけで苦しめばいい、我慢していれば大丈夫って考えてた。
けれど、私が傷つけば周りにいる私を大切に思ってくれている人を
深く傷つけてしまうのだということに、情けないけどたった今気づ
いた。

自分を犠牲にすることは、美しいことでもなんでもない。
自分勝手に自己満足で、大切な人を傷つける行為でもあるんだ。

私、きちんと更紗の気持ちを考えてなかったなと自分のばかさ加減
が嫌になった。

こんなんじゃない、親友失格だ。

「ごめんなさい…私、更紗の気持ち、ちっとも考えなかった」

「風花、あのね、」

「いいの、聞いて？」

私、ひとりでがんばらなきゃって、いつも迷惑かけてるからちゃ
んと一人で

できるようにならなきゃって、馬鹿みたいに意地張ってた。

もう自分で何とかできる時期を過ぎてたのに。

無理して自分を傷つけて自己満足に浸ることで、更紗も傷つけた。

私…恥ずかしい…… 本当にごめんなさい」

「……………」

「これからはちゃんと相談するし、できないことはできないってち
やんというから、

手がかかると思うけど、そのときはアドバイスとかしてね？」

「あ、あつたりまえじゃないっ！」

わ、私…っ！ふうかっ！ごめんねっ！！

私も馬鹿みたいに”風花が何も話してくれない！”って、拗ねてたのっ！

だから、ごめんなさいっ！」

私たちはひしと抱き合った。

お互いのぬくもりが伝わり、深い友情や愛情が交感されているみたい。

私はやっぱりここに生まれてきてよかったって、心から思った。

「…風花、ホント、無事でよかった……」

「私は、大丈夫。私の責任でもあるもの。」

だって、もし私をもっと早くにギブアップしてたら、先輩たちだって

ここまでエスカレートしなくて済んだもん。

私が逆らったり自分で何とかしようってやりすぎたから、普通だったら

やらないことまでやっちゃったんだと思うんだ」

「でも、それは！」

「うん、わかってる。」

だからといっていい行為じゃない。

けど、一方的に責めちゃいけない、自分の悪かったところも素直に認めなきゃいけないって思うんだ。

今はまだあの時の事忘れられないし、傷もめっちゃくちゃ痛いけど、でもいつかはちゃんと向き合っていけると思うんだ。

だから更紗、これからもずっと一緒にいてね？

私がんばるところ、見ててね？」

「当たり前じゃないっ！」

私だって、巧も……」

不自然に更紗が口をつぐんだ。

そっぴえば……

「ねえ、巧くんは？どこ？なんでできてくれないの？」

更紗が戸惑ってる。

何があつたんだらう？

「ねえ、何があつたの？教えて？」

「あのね、風花。巧が……ね、巧のこと、風花怒ってる？」

顔も見たくないくらい嫌いになつた？」

あまりにも予想外の質問に、私は驚いて口をパクパクさせた。

どうやったたら巧くんに腹を立てられるの？

嫌いになれるの？

そんなこと、あり得ないのに！

「そんなこと、あるわけないじゃんっ！」

……そっぴええ。そっぴええのよ、あり得ない。

私もそう言ったのに、巧みのヤツ…」
「巧くん、何か言ってたの？」

更紗は言いにくそうに、言葉を選び選び言った。

「アイツ、風花のところに行っても、きっと嫌な思いさせるからうて。

ほら、先輩たち巧のことが好きで、それで風花に嫌がらせしたわけじゃない？

だから、自分が行くと風花が怖がるかもしれないって。

そんなことないって言ってるのに、全然聞く耳持たないの」

「そんなの、あり得ない！絶対にないもん！」

「…ここからは私の推測だけど。

それってカモフラージュで、実はもっと別のことで気に病んでるんじゃないかって

思ってるの。

ねえ風花、最近巧と何か言い争いました？

だいたい最近の巧も様子おかしかったのよ。

不機嫌でとっつきにくくて、話しかけてもろくに返してこないし
「！」

私はあの公園の日のことを思い出した。

虎之助と一緒にいるところを見られて、すごく怒ってた巧くんの姿。もしかしてあの時のこと…気にしてるの？

それともあの時キスしたこと…後悔、してる？

ちゃんと話しなきゃ。

このままだったら、幼馴染にも戻れないかもしれない。
私はそんなの絶対に嫌だ。

自分の思いが実らなくてもいい。
でもずっと家族で、大切な家族でいさせて欲しい。
だから…

「ねえ、更紗お願い。巧くん、呼んできて？
……二人で話がしたいの」

かちかちかちかち…

さっきから、時計の音ばっかりがうるさいぐらいに響いている。

晩御飯を食べにダイニングに下りたら、そこには巧くんの姿だけがなかった。

どうしたのって聞いても、ギルバートさんも由梨絵さんも笑ってこまかすだけ。

やっぱり早く話をしなきゃって、気持ちがどんどん焦ってきた。

ご飯を食べた後、更紗と一緒に風呂に入って洗うのを手伝ってもらい、さっぱりして部屋に戻った。

更紗には巧くん宛てのメッセージを託した。

今晚何時になってもいいから来てって。

きちんと話したいって。

もし巧くんが私のこと少しでも許そうって気持ちがあるなら、きつと来てくれるはず。

小さい頃みたいに、私の部屋の外に植わっている、大きな柏の木に登って。

秋になると、よく柏の木の根元に落ちていたくさんのどんぐりを

3人で拾って遊んだ。

大きなどんぐりの帽子を指先にかぶせて、「アフロヘア！」なんてあの頃は今よりももっとずっと簡単で、単純で。

年齢と共に複雑になっていく関係は難しいけれど、それでもやっぱりそういう形が一番欲しい。

妹みたいな幼馴染なんかじゃない、1人の女として見て欲しい。

彼女だっと思って欲しい。

お父さんとお母さんみたいに、エドワードさんと由梨絵さんみたいになりたい。

思いを伝えることは難しい。

でも、伝えなければ理解しあえない。

うじうじ悩んで迷って、そのせいで相手にも気まずい思いをさせるなんて間違ってる。

何もなかったみたいに諦められなかったら、正面からぶつかってみよう。

ダメだったら、その時に二人にとって一番いい関係を築きなおせばいい。

全てが消えてなくなるような、そんな頼りない絆じゃないはずだもの。

時間と共に変わっていく関係が、全て悪いわけじゃない。

きつと今以上に素敵なのが待ってるはず。

だから勇気を持って巧くと向き合おう。

きちんと話をして、話を聞いて、きちんと気持ちを伝えるんだ。

私の決意が固まった時、こんこん、と窓を叩く音が聞こえた。振り返ると、ベランダに巧くんが俯きがちに立っていた。

「入って？」

私は窓を大きく開け放ち、巧くんを中に入れた。

久しぶりに部屋を訪れた彼はとても大きくなっていて、まるで部屋が狭くなっちゃったみたいに感じる。

私のプライベートルームな空間に彼の気配があることがくすぐったくて、恥ずかしかった。

そんな私の浮かれた気持ちとは正反対に、巧くんの表情は硬くて疲れきっていた。

目の下はうつすらと暗い色が刺していた。

クマが出るほど悩んでいたのかと思うと、胸が痛んだ。

私は部屋においてあるポータブル冷温庫からコーヒーと紙パックジュースを取り出した。

これは夏場でもチョコレートを部屋に持ち込んで食べたがる私のために、昔巧くんと更紗が誕生日プレゼントに買ってくれたもの。大好きなキャラクター柄の小さな小さなこいつは、季節を問わず大活躍だ。

巧くんが私の部屋に入らなくなってからも、実は、ずっと巧くんが好きな飲み物を用意していた。

いつかきつと、またここに来てくれようになるって願って。

部屋の真ん中においてある丸いテーブルに飲み物を置き、二人で向き合って座った。

お互いに気まぎれになって飲み物を一口のみ、そして沈黙。

耐えられなくなって勢いよく顔を上げて口を開くと、正面に座る巧くんも同じようにしてた。

お互いに口をあけたまま見つめあうこと数秒。

二人ともぶはっ！と噴出した。

「なんか、私たち…」

「馬鹿みたいだな！」

しばらくはくすくすと笑い合い、自分たちの挙動不審っぷりをおかしがった。

そのことで、ずいぶんリラックスできた。

今まで漂っていた張り詰めた空気が霧散し、今ではおだやかな馴染み深い雰囲気の中にいる。

ようやく、帰るべきところに帰ってきたような気がした。

「巧くんも、何か話することがあったんだ？何？」

そう聞くと、巧くんの顔が真剣になった。

まっすぐに私を見ている瞳は、とても苦しくて辛そうだった。

「まずは…風花、ごめん。謝って済むことじゃないけど、どうか許して欲しい」

「え？なっ、何のこと？」

巧くんは目を閉じ、深呼吸をしてから話し始めた。

「俺、めちゃくちゃイライラしてて、風花に八つ当たりしてた。

何で俺のこと信用してくれないんだって

…でも、一番の原因は、虎之助への嫉妬だった。

何で俺には何も言わないくせに、虎之助には相談できるんだ？

俺はそんなに頼りないのか？

…風花は、虎之助のことが好きなのか？って」

ありえない巧くんの推測に、私は驚いて首を横に振った。

それに、これほどまでに自信なさげにしている巧くんって…小さい頃以来かも。

「ないない！絶対！絶対に！それはないっ！！」

「そうは言うけど、虎之助って結構もてるんだよ？

女子にも騒がれてるし。

それに、やっぱりアイツはいいやつで、自慢できる親友なんだ。

だから、あれだけ嫌ってた風花があいつの事好きになっても、

実は嫌いな振りしてるだけで本当は好きだったとしても

おかしくないって悩んでた。

そこに、今回の事件だろ？

俺、更紗にめちゃくちゃ怒られたよ。

ちゃんと警告したでしょ、って。

俺が不甲斐ないから、風花が女の子から集中攻撃されるんだって。

正直、まさかあんなことが起こるなんて予想もできなかった。

風花が…あんな目に遭うってことも。

だから、ごめん」

なんか、巧くんの言葉にぐっときちゃった。

感動したというか、そこまで私のこと考えてくれてたんだって。

ここまで大切にされてるんだから、きつと私の気持ちをぶつけても巧くんはきちんと受け止めてくれるはず。

たとえ妹だって思ってるとしても。

「私、うれしい。

巧くんがそこまで私のことを考えてくれたんだって思ったら」

「風花…」

「私もね、悪かったってずっと後悔してたの。

先輩たちのことは、私も悪かったの。

私が1人で何とかできるって強がっちゃったせいで、結局

彼女たちの行動もエスカレートすることになったし。

1人だけ我慢すればそれでいいって考えてたけど、違うんだよね。

私が傷ついたら、家族全員が傷つく。

もし家族の誰かが傷ついたら、私も傷つくように。

そんなことにも気づかないで…本当にごめんなさい。

私…巧くに辛い思いさせちゃった」

俯いた私を巧くんがぎゅっと抱きしめてくれた。
私は巧くんの首に両腕を回し、抱きしめ返した。

巧くんが愛用しているボディソープと昔から変わらない巧くん自身の温かい香りがする。

馴染み深い安心感が、体中に広がる。

「…でもね、ほんとはね。

がんばりたいっていう気持ちももちろん本物だけど……ほんとの理由はね、

怖かったの。

巧くに嫌われたくない、お荷物だっと思われたくないって」

「風花がお荷物なわけないだろう？嫌いになんて…なれるわけない」

巧くんの大きな手が、私の頭をやさしく撫でる。

心までとろけそうな心地よさに、言いたいことが消えてなくなってしまうそうだ。

すごく小さなことをうじうじ考えてたなあ…って。

「先輩たちに私は巧くんのそばにいる資格はない、分不相応だ、おこがましいって

言われて、自分って何だろう？人に頼ってばっかだっけ情けなくなっただの。

妹みたいに私のことかわいがってくれている巧くんを利用して、頼りない振りしてたんじゃないか、私って。

自分で自分がわからなくなっ…それで、辛くて」

「ばかだな、風花」

そういうと、巧くんは私の頬にそっとキスをしてくれた。

それだけで心臓がどきりとはねる。

きつとありえないほどのどきどきは、巧くんにはればれに違いない。恥ずかしくて、でも素直になりたくて。

私は巧くんにしがみつく腕に力を入れた。

「だいたい、何でそんなことを本気にしたの？」

きた！

いまだ！

今なら伝えられる。

私の本当の気持ち。

「だって、私……あのね、私、巧くんのこと好き、だから…

ふさわしい女の子になりたかったの！

あの！家族とか、妹とか、そういうんじゃない！

えと、巧くんの周りにいる女の子みたいにうんと大人っぽくて…

っ！！」

焦りに焦りながらの大演説中に、突然唇を塞がれた。

一瞬何が起こったのかわからなかった。

呆然としていると、たまらなくセクシーな雰囲気をもった巧くんが言った。

「風花、キスをする時は目を閉じて欲しいな」
「へ??？」

反射的にぎゅむっと目を閉じる。
それを見てくすくす笑う巧くんの吐息が唇を掠めた後、さっきよりも強く巧くんの唇を感じた。

何度も唇を優しくこすり付け、食み、軽く歯を立てられるたびに、心拍がありえないビートを刻む。

そしてようやくさつき私の演説をさえぎったのは、巧くんのキスだったんだと気づいた。

そのうち舌先で唇をなぞられ、力が抜けたところに巧くんの舌が入ってきて、私の舌に絡み付いてきた。

驚き、戸惑ったあと、体の深い部分がきゅうつと締め付けられる。

口の中をなめられる度に呼吸が乱れ、体のあちこちがうずき、力が抜けていく。

いったいどれぐらいの時間そうしていたのかわからない。

時間とか空間とかそういう感覚の全てが消え去って、今はただ巧くんという存在しか感知できない。

不思議な感覚。

まるで世界には二人しかいないみたいだ。

唇が離れた時、はたと気づいたら私は仰向きに寝転んでいた。

巧くんが私に覆いかぶさるようになして見下ろしている。

瞳が濡れて鋭くって、なんだかくらくらする。

唇がてらたら濡れ光ってるのは、きつとさっきの名残。

こんな、男の色気ムンムンの巧くん、見たことない。怖いような、でも目が離せなくなる。

恥ずかしくて、照れくさくて、でも自分の中に全て取り込んでしまいたくなる。

巧くんはもう一度私の唇に優しい、触れるだけのキスを落とした。まるで誓いのような、キス。

それから私の目をまっすぐに見つめて、言った。

「愛してる、風花。」

これまでも、これからも、お前ひとりだけ」

信じられない告白に、目を見開いた。

私の全身、きつとまっかつかだ。

そんな私を見てくすと笑った巧くんは、そつと額を私の額と合わせた。

この夜から、巧くんは正真正銘私の彼になり、私は正真正銘巧くんの彼女になった。

「長かったわよね、こうなるまでが」

テラスでジュースを飲みながら、更紗が言った。

もどかしくて、歯軋りしすぎて奥歯磨り減りそうだったって。

巧くんの胸倉をつかんでゆすったこともあったらしい。

いつもクールな更紗がそんなことするなんて、思いもしなかった。

「だいたい、風花たちはお互いに想いあってるのばればれなのに、お互いだけが気づいてなかったのよね！」

おかげですっごい迷惑蒙ったのは私ってわけ。

お父さんたちだってしょっちゅう”進展あったか？どうだ？”なんて聞いてくるし……」

「えっ！お父さんたちいつ！？何でっ！？」

「だから、バレバレなんだって。」

巧なんて中学ぐらいの時、パパに絶対に風花の部屋入っても

自分の部屋に風花入れてもいけないって釘刺されてたし」

「何でダメなの？」

更紗はジトつと睨んできた。

……呆れてる？

はあ、と大きなため息をこれ見よがしについて、また一口ジュー

入をすすつてから言った。

「馬鹿ね〜。」

「巧だつて男なんだから、うっかり間違いが起こったら困るでしょ？」

「間違いって？」

「…ほんっと、信じられないほどにぶっ!!」

「辛抱効かなくなつて、風花押し倒したら困るって言うてんのっ！
中高校生で妊娠なんて嫌でしょ？」

私は一瞬きよんとして、あまりにもあからさまな表現に顔が真っ赤になつた。

でも…

「ないない！絶対にないっ！」

「巧くんがそんなことするわけないよ〜!!」

やさしくて紳士な巧くんだもん。

そんなことするなんて、考えられないし。

この間だつてあんな状況になつたのに、そんな…赤ちゃんが出来る
ようなこと、しなかつたしっ！

それなのに、更紗は「とんだ甘ちゃんね〜」なんてせせら笑ってる。

「いいわよ。私の言うこと話半分聞いてたら。その時が来て慌てるの、風花だし。」

こんな自己防衛できてない相手と一緒にいるのに何もできないって、

巧も可哀想だし」

「そ、そんなことっ！」

「風花が巧の頭の中覗いたら、絶対に怯えて逃げ出すわよ。でもま、いいんじゃないの？」

出来ちゃった結婚でも、無責任だって怒りこそすれ、絶対に反対する人なんていないもの」

がーっ！

やめてえ〜っ！！

絶対に、ぜえーったいにっ！ないもんっ！！！！

あまりの言い草に絶句していると、「……出来ちゃった結婚って」って呟きながら巧くんが後ろから抱き付いてきた。

ぎゃあっ！とありえないほどひどい悲鳴を上げて、椅子から数センチ飛び上がってしまった。

ぎぎぎ…ときこちなく振り向くと、巧くんが頬にキスした。

ぼんっ！と顔が爆発したかと思った。

「だから、風花がここまで世間知らずだったら、気づいたら出来ちゃった結婚だって

言っただけ。

どうせ片棒担ぐのあんただろうし、この件は巧がしっかりしてくれないと

おじさんに殴られるわよ?」

「…大丈夫。うまくやるから。ね、風花?」

「へ?あ、う、うん!」

「やっぱり全然安心できないっ!!」

叫ぶ更紗の一言で、巧くんは肩を揺らして笑った。

何がなんだかわからないけれど、二人に遊ばれたみたいで、私はぶつと膨れた。

巧くんがさらに胸に私を引き付ける。

低く響く笑い声が、背中越しに響いてくる。

私の胸がきゅうんと絞られる。

「風花、ずっとずっと、死ぬまで大切にするからね?」

唇の端っこに大きな音がするキスを落とした巧くんを見て、更紗は目をくるりと回した。

私は恥ずかしくて、照れくさくて、とっってもとっっても幸せな気持ちになった。

ふわぁ、と思いつきり伸びをして欠伸をひとつ。

このところ熱帯夜が続いているせいか、どうも寝苦しい。

もともとエアコンが苦手だから、窓全開で寝ているせいかもしれない。

…なんて、眠れない一番の原因などわかりすぎるくらいわかっているのだけれど。

俺は窓の正面に見える窓に目を向けた。

「…風花、まだ寝てるんだろっな」

先月、紆余曲折を経て、ようやく彼女になつてくれた幼馴染。

小さい頃から赤ん坊のように深く眠り、地震があつても爆発が起これども顔に落書きされても起きそうにないタイプだった。

本当に子供のように無邪気で、純粹で、鈍くて。

いろいろ苦労させられたけど、それだけの価値はあつた。

彼女を思うだけで心が温かくなり、そして体が熱くなる。

自分の思いの強さと欲望の大きさに、戸惑うことが多くなったのはいつの頃からだろう？

一時期、大事にしたいのに自分の手で汚してしまいたいという相反する想いに、ずいぶん悩んだものだった。

それがごく自然で、当たり前のことだったと、少しだけ大人になつた今では理解できるけれど。

わかつたらわかつたで、その気持ちをコントロールすることがいかに難しかったことか！

風花を抱きしめるたびに、全てに触れたいという想いが強くなつていった。

…自分の思いすら伝えられなかった、へたれだというのにならだけ暴走するって…と自分の反応に呆れたものだ。

お互いの想いを伝え合えた時、盛り上がった気持ちのまま風花を押し倒してしまったことがあった。

キスを繰り返して、どんどん先走っていく欲望に任せ風花のポリウームの胸を撫でさすり、突き出してきた蕾にさらに興奮し…このまま一気に思いを遂げてしまいたいという気持ちが暴走を始めるのだ。気づけば風花はぐったりと気を失っており…俺は自分の愚行にはたと気づいた。

風花は大変な事件に巻き込まれ、まだ满身創痕だというのに。

乱暴に押し倒してはいないと確信しつつも、どこか体に障ったかもしれない。

風花自身もある種のハイ状態になつてたし、そういうところにつけ込んだみたいで口の中に苦い後悔の味が広がった。

焦つて名前を呼びながら揺すってみると、気持ちよさそうな寝息が聞こえてきた。

それでも心配で、風花をベッドに寝かせてからおじさん、おばさん呼びに行つた。

情けない。

伏せるべき部分を伏せて説明したけれど、それでも全てお見通しだったようだ。

静かな、それでいて効果のあるお小言をもらい、真摯に反省した。

風花のご両親は、俺や更紗にとって第二の両親だ。

風花も家族も悲しませることは絶対にしたくない。

そのことを忘れないように、行動に気をつけ自分を律していかなければと気持ちを新たにした。

けれど、風花を想う気持ちに歯止めがかかるとも思えず…風花の怪我が治ってからはある種の苦行に励んでいる。

風花は小さい頃から天然で、しかもスキンシップが大好きだ。

事あるごとに体に触れ、手をつなぎ、抱きついてくる。

本人にとってはそれが自然なことなのだという事は、小さい頃から見ているのでわかっている。

けれど、小さいくせに豊満な体が押し付けられる甘い拷問は、健全な男にはかなり辛いのだということにそろそろ気づいて欲しい。

今のところは…まあ、俺が多少は満足いく”触れ合い”で止めている。

しかしこれもいつまでもつか…周囲の状況を考えると卒業までというのが妥当だろうが、自信は全くない。

その度に先月の事件を思い出し、初心を思い出すようにしている。

それにしても、あの事件は本当に肝を冷やした。年取ったって何したって決して忘れられない、恐ろしく腹立たしい事件だった。

離れていこうとする風花に気づいて焦り、苛立ち、虎之助に嫉妬して風花にむりやり襲い掛かって、自己嫌悪でへたれているところにあんな恐ろしい光景を見せられて。後悔してもしても仕切れなかった。

あの日、萩の花に行ったのは、たまたま偶然だった。

3年に一度だが、萩の花と俺の学校である青風林は、合同で文化祭をすることになっている。

生徒会副会長である俺は、会長の代行として話し合いのために来ていたのだ。

風花のことを考えながら指定された会議室へと続く廊下を歩いている途中、なんとなく窓の外に視線を向けると、ちらり体育館の裏に人影が見えた。

なにやらもみ合っているようだった。

不審に思い立ち止まってもう一度目を凝らすと、本当に一瞬だけ見慣れたツインテールとリボンが見えた。

「風花：？」

ぞわり、と寒気が背中を這い上がる。

俺はきびすを返し、走り出した。

「お、おいつ！長谷！？」

「体育館の裏っ！なんかおかしいっ！」

それだけ叫ぶと、後ろも振り返らずにひたすら体育館の裏に向かって走った。

近づいていくにつれて、聞き苦しい金切り声や笑い声が聞こえてくる。

「い、いやっ…巧くんっ！」

その合間から聞こえた、くぐもった小さな叫び声。

女たちに抱えられ、傷ついてぼろぼろになった風花がいた。

一瞬頭の中が真っ白になり、ぼろぼろになった制服を必死になって守って身をよじる風花を見た途端、真っ赤に染まった。

女生徒を突き飛ばし、風花を奪い取り抱きしめる。

そのぬくもりを夢中になって体の中にしみこませたい。

ぎゅっと抱きしめると、風花は痛み顔に顔をゆがませ、涙を滲ませた。

冷静さが消え、怒りがさらに倍増する。

生まれてはじめて殺意が芽生えた。

こいつら全員ぶっ殺してやると、そんな残酷で野蛮な気持ちが自分の中にあると知った時、底知れない喜びと嫌悪がない交ぜになって突き上げた。

凶暴な野獣が俺の中から飛び出そうとした。

怯えきって震える4人を睨みつけると、紙みたいに真っ白になった。

牙を剥こうとしたその時、更紗と先生が現れた。
滅多に聞かない更紗の悲鳴に、頭がすつと冷えた。
大きな塊を飲み下し、先生に状況を説明し、この場を譲った。

その場を離れて保健室に向かう途中に、俺は一生ほどの後悔をした。
自分自身の不甲斐なさを呪った。
風花が俺の手の中で気を失った時、俺の心臓は止まってしまったか
のように痛んだ。
風花がいなければ、この世界には今の半分ほどの価値もない。
それを強く実感した。

なんであんなくだらない嫉妬のために、こいつを一人にしたんだろ
う？
なんで拒否されても、ずっと一緒にいなかったんだろう？
なんでもっと粘り強く風花から話を聞かなかったんだろう？

後悔が大波のように寄せてくる。

なんで風花はもっと早く俺に助けを求めなかったんだろう？
情けなくてたまらなかった。

結局女たちが風花を襲った原因が俺であることを知り、余計に自分

に腹が立った。

どっと落ち込んでいる時、更紗から伝言を聞いた。
風花が話があるからと。

どんな言葉で罵られても仕方がない、俺は覚悟を決めた。
とにかく、風花に謝ろう。

そして、もう二度とこんなことはない、全力で守るとわかってもら
おう。

思いを伝えて、それがかなわなかったとしてもずっと守るからと約
束しよう。

俺はまるで売りに出される子牛のように惨めな気分で、風花の部屋
の前にある柏の木によじ登った。

覚悟して行ったのに、風花はこんな俺でも好きだといってくれた。

どれほど俺が救われたか、風花にだってわからなかっただろう。

俺はまるで騎士の様に、風花に忠誠を誓った。

二度と傷つけたりはしない。

…押し倒してしまったけれど。

その後の連絡で、女たちは主犯の1人は強制退学、そして残る3人は自主退学の処分となっただらう。

不服を申し立てている親もいるようだが、それでも夏休み明けには解決しているだろう。

腹は立つが、こちらは学校に任せるしかない。

今は風花が傷を癒すことに専念しなければ。

きっと完全に消化するには、ずっと長い時間がかかるだろうから。

だから、俺はこれからずっと今以上に風花を甘やかそうと心に決めている。

そして、今後一切俺の思いを疑わせないように、想いを口に出していくつもりだ。

どれほどのバカップルだと思われても構わない。

そうしなければ、俺の心の平安は一生やってきそうにない。

更紗とテラスで話をしている風花を見て、心の中一面に花が咲いたように浮き立った。

どうせろくな会話をしていないんだろうけれど、それでもよかった。風花が笑ってくれていたら、風花がのびのびと生きていてくれたら、それが一番だ。

俺はこっそり近づいて、後ろから風花を抱きしめる。

昔から馴染んだ、花のような甘い香り。

愛しているという想いが溢れ、慣れた甘酸っぱい痛みが全身をしびれさせる。

「風花、ずっとずっと、死ぬまで大切にするからね？」

幼い頃から繰り返した誓いを胸に、風花に口付けた。

「…ばかっふる」と呟いた更紗に、にやりと笑って見せた。

<完>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4548u/>

おさななじみの法則

2011年8月11日21時14分発行